smile

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｍｉｌｅ

【Ｎコード】
Ｎ８７１７Ｙ

【作者名】
刃下

【あらすじ】
絵本作りに奮闘する弟と姉の話

説明と一話目（前書き）

完全にフィクションです。実在しているものとは関係ありません。

説明と一話目

教科書、手紙、離婚届、その他多くの紙媒体が電子媒体へと移行し始めたのは、まだまだごく最近のこと。
某国のお偉い人が頭をひねりにひねって打ち出した資源保全の政策。その名を「ＡＤＭＰ（ａｌｌ　ｄｉｇｉｔａｌ　ｍｅｄｉａ　ｐｌａｎ）」。
アルファベット４文字にして少しかっこよく見せようとしているのがバレバレだけど、要するに木なんて切らずに、デジタルデータで何でもかんでも保存しちゃおうってなところだ。
某国で１０年前採択され可決。その２年後に施行されている。
わが国でも追従するような格好で、近年採用が決まった。本屋や郵便局などの反対もむなしく、今や多くのユーザーが日常生活でこれを使用している。
とはいっても、商店街を歩けばいかにも年季の入った本屋だってまだあるし、一部では「知ったこっちゃねえ。私は紙を使うんだ」って人もいたりする。当然といえば当然の事だ。

絵本。
これもまた当然の如く、時代の呷りを受け電子媒体への移行をはじめている。
なんとかｐａｄやなんとかｐｈｏｎｅで世界中の絵本を見ることができるようになった。
もちろんのこと日本語に翻訳されていて、値段も紙媒体のときの半分以下の値段で読むことが出来る。
このようにｋ・・・むがっ。・・・ふぅ。あー、そこの君、そう君だ。
君にはお気に入りの絵本があったか？今でも内容を覚えている絵本があるんじゃないか？

そのお話をだ。四角い箱だかなんだか分からないものを通して見るのは味気ないと思わないか？
紙本来の手触り、ページをめくる時のわくわくが感じられないと思うだろ？
どうだ、寂しいだろ。寂しいと思った君は今すぐにＹＵカンパニーが出版していｒ・・・もがっ。
ちょっと、姉さん勝手なことしないでよ！・・・という訳でこんなご時世だろうと紙媒体で絵本を作り続けている僕らＹＵカンパニー。これはその絵本作りの記録である。

◇

「大和ー、まだ着かないのかよー」
先ほどまで後部座席でぐーすかと気持ち良さそうな寝息をたてていた女がいつの間にか目を覚ましていた。
顔にはタオルをのせ、両足を助手席の頭の部分にのせている。
靴下は脱ぎかけで、服もしわくちゃ、へそ丸出し。これを女性と表記していいものか迷うな。
「まだだよ、うめ姉さん」
「まーだーつーかーなーいーのーかー、こーらーんーやーまーとー」
「もう少しだってば、湖蘭梅姉さん」
「おい、次フルネームで呼んでみろ。足の指を４本にしてやるからな」
僕がバックミラーに目をやるより早く、姉さんは起き上がり耳元でドスの聞いた声をだした。
「はい・・・ごめんなさい・・・」
姉さんはフルネームで呼ばれることを何より嫌っている。
小学生の頃、男の子グループにご飯ウメーと呼ばれていじめられていたらしい。
湖蘭　梅　↓　こらん　うめ　↓　ご飯　ウメー

・・・すごいセンスだ。
始めて聞いたときは、小学生のネーミングセンスよりうめ姉さんがいじめられてたってところに驚いたけど。

「この車がポンコツだから遅いんだろ?はっはっはっ」
そういって姉さんは持ってきたポテトチップスの袋を豪快にあけ、ぼりぼりとむさぼり始める。
カスが落ちてる・・・ああ、そんな手で窓を触らないで・・・。
こっちの思いとは裏腹に姉さんはまるで自分の部屋かのように僕の愛車を汚しはじめる。
僕は常々思っていた。
この車と僕は生まれる前からの運命で繋がっていて、それを姉さんといえども汚すことは絶対に許されないと!
・・・いや、中古車だけどさ。
免許をとって、これが生まれてはじめての大きな買い物だったんだ。
それが姉さんの『弟の物は私の物』というジャイアニズムによって汚されていく・・・。
悔しい・・・けど・・・すっげー悔しい。
ちなみにこの車の前後には若葉マークが燦然と光り輝いている。

「山道の運転難しいんだから、姉さん少しは静かにしててよ」
「山はいいけど、キャストの手配はちゃんとできてんだろうな?」
ははっ、会話が繋がってないだろ?姉さんは僕の発言なんて最初の一文字しか聞いてないんだぜ。
もう慣れたさ。
「うん、ちゃんと現地集合呼んだよ。それに木の刈れる山と桃の流せる川のある場所には今向かってる。万事大丈夫さ。」
それでわざわざこんな糞遠い場所まで運転することになってしまった。
「それならいいけどな・・・、もし何かミスがあれば・・・」

「・・・あれば・・・？」
「お前の体で支払ってもらうからな。」
姉さんは後部座席から身を乗り出すと、僕のほっぺたを舐めながら言った。

説明と一話目（後書き）

感想をお願いします

二話目（前書き）

全部フィクションです。全部関係ありません。

二話目

「姉さん、もう着くよ」
ポテトチップスの袋に片手を突っ込んだまま、文字通り食い倒れた状態で二度寝している姉さんをバックミラー越しに起こす。
姉さんは一瞬だけ薄目を開けた後、すごくめんどくさそーな顔をした。
んんーっと怒鳴るような声を漏らし、寝返りを打ちながら持っていたポテトチップスの袋を座席の下にぶちまけた。
「なんてことするんだよ、そこは掃除するのが大変な場所なんだぞ！」
「うるへーなー、声がでかいんだよ。手が滑っただけじゃんか。」
「嘘つけ、わざとだろ。姉さんはいつもそうだ。自分で掃除したことがないからそんなことができるんだ。だいたい自分の部屋だって僕が呼び出されて」
「はいはい、うるさいうるさい。わざとやったよ、悪かった。これでいいか？」
姉さんはぶうっとほっぺたをむくらませた。
バックミラーに映る大人に怒られてしゅんとしてしまったときの子供のようないじけた顔。
こういうところは純粋に可愛いのになあと思う。
なんていうか人によっては守ってあげたい衝動にかられたりするのだろう。
故に我が姉ながら非常に残念である。
なぜ残念なのかといえば、姉さんの場合精神年齢とわがままのレベルまでもが子供だということだ。
一言でいえば姉さんは内面が糞ガキ以下だ。
知っているだろうか。

歯磨き粉が携帯食になるということを。
これは噂でも都市伝説でもサバイバルの知恵でもない。
それはある日の出来事だった。
「うわあ・・・まじかよ・・・」
「はっはっはっ、面白いなこいつ」
弟が買ってきたせんべいを姉が一人で食べ、弟がついだ二つの湯のみのお茶を姉が一人で飲む。
どこにでもある一家団欒の風景だ。
テレビでは男のお笑い芸人が女性タレントの口紅を食べるという芸を披露している。
「あんなものよく食べるなあ、この後絶対お腹壊してると思うよ。いくらお腹が減っても真似しちゃ駄目だよ姉さん」
「むっ・・・でもこれはこれですごいじゃないか。こいつは遭難しても口紅があれば生きていけるんだぞ。他のやつは食べるものがなくて一人、また一人死んでいく中、こいつは口紅を食べて生き残れるんだ。私は尊敬するなー」
「こんな人を尊敬しちゃ駄目だよ姉さん・・・」
そもそも食料を持たずに口紅を持って遭難することなんてあるのだろうか。
すると姉さんは手に持っていたせんべいを一枚ぼりっと噛み砕くと、少し考えて呟いた。
「口紅がいけるなら・・・歯磨き粉だって食べれそうだよな」
「ど、ど、ど、どうかなあ」
そのとき僕はすでに気がついていた。
ああ、僕は歯磨き粉を食べなきゃいけないんだ。
「見たいなー、歯磨き粉を食べてるところ」
見たいなーとはつまりやれということである。
姉さんは立ち上がり洗面所にあった開けたばかりの歯磨き粉を手に戻ってきた。
「ささっ、ぐぐっといっきにどうぞ」

「全部！？」
姉さんがどうぞどうぞとジェスチャーで勧めてくる。
「遭難してお腹が減ってるんだぞ。たくさん食べなきゃ死んじゃうぞ？」
「でもほら、遭難してるなら節約しないとすぐなくなっちゃ」
「いいから飲め」
その日は下痢が止まらなかった。

「おい、前見ろ、前」
姉さんの叫び声ではっと我に返る。
いつの間にか目の前にカーブが。悲しい記憶を思い出しているうちにトリップしていたようだ。
慌ててハンドルをきる。
「勘弁しろよなー」
大きくため息をついて姉さんは座席の背もたれに倒れこんだ。
「ご、ごめん」
ここは山の中。カーブを曲がり損ねれば崖下にまっさかさまだ。
姉さんが叫ばなければ、本当に遭難するところだった。危ない危ない。
「しょうがないなあ、まったく。じゃあ姉さんはまた寝るから」
そう言って姉さんはおもむろに座席をかたむける。
まだ寝る気か。寝る子よ、これ以上育ってもらうと困るんだが。
主に食費とか食費とか食費とか。
「ちょっと姉さん、もう着くってば」
「んー、あー、・・・ぐぅ」
この野郎。
「ちょっと起きてよ姉さん」
「ううーあー、ううー、梅ちゃんクイーズ！パンはパンでも食べられないパンってなーんだ」
読んでる人はいきなりのことで驚いただろう。

これは姉さんが編み出した、一分一秒でも長く寝ていられるという技である。
相手（主に起こしにいく僕）にクイズを出して僕が答えるまで、寝ていられる時間を稼ごうというものである。
ちなみに出題パターンは3パターンしかないが、答えは無限大にある。
本人いわく頭が寝てるからクイズはとっさにでてくるだけらしい。
「フライパン」
「ぶっぶー」
「パンダ」
「はずれー」
「パンツ」
「ちーがーうー」
「着いたよ」
サイドブレーキをかけて、エンジンを切った。
運転席から降りると、後部座席に回って姉さんを揺り起こす。
「で、結局正解はなんだったの？」
「正解はなし。食べられないパンなんてこの世には存在しない。つまり沈黙が正解。」
「沈黙してたらいつまでたっても起きないだろ馬鹿」
僕は寝ぼけた姉さんを引きずりながら山の中にぽつんと建つ古ぼけた民家へと向かった。

三話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

三話目

舗装のされていないでこぼこ道を車で登ること二時間弱、森の少し開けた場所にぽつんと一軒家が建っていた。
渡されていた鍵で錠を開け、少し重たい引き戸を通って家の中に入る。
中は光が差し込まず、薄暗かった。
僕は窓のところのついたてをはずし、部屋に日光を入れる。
もう建てられて何年の月日が経つのだろうか。
土壁は所々はがれかけていて、いかにも昔の木造の家といった感じ。
建っていたというよりは忘れ去られていたという表現が似合いそうな、そんな雰囲気だ。
文化財にでも指定されていそうな外見だが、一年前までは人が住んでいたらしい。
前に住んでいた老夫婦は、二人とも老人ホームに転居することになり、老夫婦の息子が取り壊すのはもったいないと、管理しながらこうしてドラマの撮影会社や、僕らみたいな物好きに安く貸し出している。
「うひゃー、今にも崩れそうだな。これは地震に耐えられないだろう」
そういった情緒が全く理解できない姉さんは早速土壁のはがれかけた場所をほじくり、シロアリの如く古民家の破壊をはじめていた。
「姉さん、崩れたらしゃれになんないからあんまり触っちゃ駄目だよ。」
働かない姉を他所に、僕は車から荷物やら小道具やらを運び出す作業にかかることにした。
作業をはじめて３０分ほど。
ドラマの撮影なんかで何度も使用されていたからだろうか。

部屋は少しホコリが積もっている程度で、十分に綺麗な状態だった。
「おーい、やまとー。ポテトチップスの袋捨てたいんだけど、ゴミ箱ないのかー？まあいいや、そこらへんに捨てとこっと」
ちょうどまさに今、我が姉に汚される前まではゴミ一つ落ちていなかった。
「姉さん、ゴミはゴミ袋にいれてよ。持って帰るから」
「え、何で持って帰るんだよ。捨てて帰ればいいじゃん」
そう言って姉さんは壁の崩れた場所にポテトチップスの空き袋を詰めはじめた。
僕はいけないと思いつつもその光景をぼーっと眺めながら、どうか姉さんの馬鹿力で壁が崩れませんようにと祈るだけだった。
姉さんに昔、ブロックの塀と塀の間に無理やり詰め込まれて抜けなくなったあげくレスキューを呼んだときのトラウマが襲ってくるも、それを間一髪のところで拭い去る。
（しょうがないから、後で僕が取り出して捨てておこう。）

「おじゃま、しますよ」
玄関の引き戸がゆっくりと開いた。
「えっと、来音さんですよね？今日からよろしくお願いします」
僕は戸の向こうに立っていた老人二人に頭を下げる。
「こちらこそ、おねがい、いたします」
おばあさんはそう言って深々と頭を下げ、おじいさんもつられて頭を下げた。
「じいちゃんばあちゃん、今日はよろしくな」
大手を振り上げて姉さんが挨拶をしたところで、またも戸の向こうに来訪者が現れた。
「自分、岩雄です！今日はよろしくおねぁぃしゃす！」
この静かな土地とはミスマッチなほど声の大きい青年が帽子を脱いでお辞儀をした。
見たところ僕と年齢は同じくらい、だが身長は僕なんかより随分と

大きい。
（岩雄くんか・・・主人公役の人かな？あれ、でもそんな名前だったかな？）
「あの、お兄さんのお名前教えてもらってもいいですか！」
岩雄くんは体が大きく、ただでさえ声が大きいため、僕は一瞬ぎょっとしてしまった。
「僕ね、僕は湖蘭大和。後でもう一度しっかり紹介するけど、今は名前だけ。あっちは梅さんで、こちらが来音さん夫妻」
「みなさん、今日はよろしくおなしゃす！」
とても元気のいい青年だ。スポーツマンって感じで爽やか。
こちらまで元気になってくる。
しかしなぜか姉さんの顔が曇っていた。
「おい、猿。こっちこい」
うお、なんて直球な。
岩雄くんは何事もなかったように、はいと気持ちのいい返事をして嬉しそうに姉さんに近づいていく。
岩雄くんの顔はこう言ってはなんだが、主人公の顔って感じとは違う気がする。
なんていうか、そう。姉さんの言葉を借りれば顔が猿っぽいのだ。
いや、もう・・・これは猿だ。
これぱっかりは派遣した会社の選択なので、来てしまった今どうこう言ってもしょうがないのだが、履歴書の顔とあまりに違いすぎてだいぶ行く先が不安になってくる。
「・・・・」
姉さんは猿に、いや岩雄くんに耳打ちする。
猿くん、いや岩雄もその後、姉さんに耳打ちした。
「あー・・あっはっは。分かった分かった。そういうことなら大丈夫だ。あっはっはっは」
姉さんは何かに納得すると大笑いしながら部屋の外に出て行った。
いったい何だったんだろう。

そうこうしている間に、時計の針はもうすぐ正午を刺そうとしていた。
日が暮れないうちに撮れるところまで撮りたいので、とりあえず来音さん夫妻と打ち合わせをはじめることにした。

二人とある程度話したところで、姉さんが大きな袋を抱えて戻ってきた。
袋から宝物を取り出すかのようにおおげさにカメラを取り出す。
「それでは諸君、撮影に入ろうじゃないか！」
姉さんの眼はキラキラと輝いていた。

◇

三話目にしてとうとう説明する時がきた。
ここに至るまで三話もかかるとは思わなかった。
お前らさっさと絵本作れよと思われたかもしれない。
それはまあいいや。
聞いて欲しいことは一つ。
僕ら兄弟はそろって絵が下手なのだ。
不器用ずぼらな姉さんはもちろん、僕だって人に見せられるほどの絵は描けない。
ならどうするか？
姉さんの頭脳が考えに考えて出した答えがこれだ。
実写でいいじゃん？
逆転の発想でも何でもない。これが僕らに出来る最良の選択。
だから絵本なのに絵は一切使われていない。
姉さんは革新的だと思っているらしいが、説明のところで紙本来の手触りだとか、ページをめくる時のわくわくだとか御託を並べていた人と同一人物の考えだからねこれ。

・・・まあ、僕は姉さんがそう言うなら従うだけなんだけどさ。

といったところで三話目終了。四話目に続く

四話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

四話目

「まずは、おじいさんが柴刈りをしているところの写真を撮りますね。おばあさんと岩雄くんは休んでいてください」

僕は二人に声をかけると、すでに衣装に着替えて立派な童話のおじいさんとなった来音のおじいさんと姉さんを連れて、民家の裏手にある森の中へと進んでいく。

数分歩くだけで細い木のたくさん生えた雑木林にたどり着いた。

姉さんは雑木林の地形を確かめるように歩き回り、傾斜の少ない場所に三脚をたてた。

ちなみに姉さんは写真の勉強をしている訳でもなければ、撮るテクニックだって人並み以下だ。

特別、撮るという行為に思い入れがあるわけでもない。

その姉さんがなぜカメラマンという重要な役職についているのか。

姉曰く、一万円そこそこしたこのカメラを私ではなく大和が使うなんて絶対に許さないと。

そしてこれも姉曰く、大和が５０００円以上の物を所持する際は姉に許可をとること。

お分かりだろうか。

僕は常に、重度の過保護に見せかけた姉の呪縛というものを背負いながら生きているのだ。

あの愛車（中古）だって姉さんが便利に使うために許可がおりただけだ。

その前の携帯ゲームだって姉さんに買った次の日奪われるし、通販で買ったエアインマックスだって・・・おっと話を戻そう。

まあ、姉さんも自分から言い出したもんだから一応カメラの使い方を必死になって覚えたみたいだし、カメラのメンテナンスをやらされるくらいのことなら僕は特に文句はない。

姉さんはカメラのセッティングがうまくいかなかったのか、三脚を立てる新しい場所を探し始めた。
手持ち無沙汰になった僕は、衣装のおかげかすっかり後ろの風景になじんだおじいさんに話しかけた。
「ずっと来音のおじいさん、って呼ぶのもなんか変ですよね。失礼でなければお名前で呼んでもいいですか？」
「・・・・」
返事はなかった。
いきなりなれなれしかったかなと少し後悔し始めたとき、
「・・・ええぞ」
とおじいさんは小さく低い声で返事をした。
「ありがとうございます、電太さん。僕のことは大和って呼んでください」
「分かったわい」
またも唸るような低い声が返ってくる。
「おーい、セッティング終わったぞー」
姉さんが別の場所に三脚をたて終え、大きく手を振って呼んでいる。
「それでは電太さん。柴刈りをしているところを写真に撮るんで、この斧を持って振りかぶってもらっていいですか」
僕は持ってきた小道具の斧を電太さんに手渡した。
「この斧は偽物なんで本当に切れることはありません。ですから、木の幹に振り下ろしたところでとめてください。そこを写真でとりますから」
「・・・・」
（返事がないけど、分かったのかな。まあこんなおじいさんだけど役者さんだし大丈夫かな。）
「じゃあ撮るぞー、じいちゃん」
姉さんは腰をかがめてカメラに目をやった。
説明中、終始無言だった電太さんは勇ましく斧を振りかぶった。
「では撮ります、３．２．１」

そうだ、忘れていた。
姉さんがカメラマンなら僕の役職は何なのか。
僕は助監督だ。といっても助けるはずの監督はいない。
なぜなら撮るシーン、お話、設定。
大切な事はすべてカメラマンの姉さんがすべて決めてしまうからだ。
だから僕は助監督といっても仕事はカメラマンから押し付けられる雑用ばかり。
あとすることと言えば撮る前の打ち合わせと撮るタイミングの秒読みくらいなもんだ。
スパン！
今までに聞いたことのないような音が耳に届いた。
次の瞬間、目の前の木が支えをなくしゆっくりと傾き始め、最後には倒れてしまった。
「すげーな、じいちゃん！」
感嘆の声をあげる姉さん。
「これでええんかの」
電太さんは手に持っていたレプリカの斧を僕に手渡す。
「いや、オッケーオッケー！最高の写真が撮れたよ、じいちゃん。もう最高！」
ハイテンションの姉さんがカメラを三脚からはずしながら、電太さんを褒めちぎっていた。
僕は慌てて渡された斧を注意深く調べてみる。
しかし何度調べても斧は偽物。木が切れるはずがない。
次は倒れた木を調べてみた。
日本刀の居合いで斬られたきゅうりのように、真っ二つに木が切られていた。
「大和くんや、わしはもう帰ってええかの」
「あ、はい。次の出番まで部屋で休んでいてください」
カメラと三脚を持って器用にスキップをする姉さん。
僕は何かしゃくぜんとしないまま民家へ戻った。

「次は来音のおばあさん、お願いします」
「はい、はい」
「大和くんよ、わしは少し寝とるけどええかの?」
「ええ、大丈夫ですよ。電太さん。」
「あらら、おじいさん、いつ大和くんと、仲良くなったのかしら。ずるいは、おじいさん、ばかり。私も大和ちゃん、って呼んで、いいかしら?私のことは、明宮亜ちゃんと、呼んでくださいな」
「あ、はい・・・。えっと」
流石に女性を名前で、しかもちゃん付けで呼ぶのは恥ずかしいな。
「明宮亜さんでいいですか?」
「そうね、でもやっぱり、明宮亜ちゃんの方がいいわ」
あくまでちゃんにこだわるのか。
「それならおばあちゃんでは駄目でしょうか?」
「おばあちゃん・・・、そうね、大和ちゃんが、それでいいなら、いいわよ」
僕の手をとりながら、微笑み返すおばあちゃん。
「ばあちゃん、大和。もう行くぞ!」
待ちきれずに飛び出した姉さんを追って近くの川へと向かった。

「おい、本当にこの川か?」
「うん・・・」
「ものっすごい流れ早いぞ」
「僕もそう思うよ」
「こんな川に流したらあっという間に流れてくぞ?」
「うん・・・そうだね」
川は昨日、一昨日と降った雨で増水していた。
川幅は広がり、流れは想像していたのよりもっと早い。
「もうどんぶらこって感じじゃないもんな。ちょっとしたウォータースライダーだぞこれ」

「まずいかもね・・・」
遠くはるばる自作して持ってきたお手製の大きな桃（偽）。
耐水性にする関係でだいぶ重たくなってしまった。
この川ではおばあさんの洗濯シーン、流れてくる桃、おばあさんがその桃を拾うところを写真におさめようとしていた訳だが、色々と問題が浮き上がってきた。

運動の勢いとは、これすなわち重さ×速さ。
桃が重ければ重いほど、流れる速度が早ければ早いほど、桃を止める時には力が必要になる。
僕と姉さんは二人で川べりに一人たたずむおばあちゃんに目をやった。
川原の石に足をとられ足どりはおぼつかず、腕も少し力を加えれば今にも折れてしまいそうなほど細い。
下手をすれば交通事故と同じくらいの衝撃があの体を襲うことだろう。
「やめたほうがいいんじゃないか。私は殺人犯の姉にはなりたくないぞ」
聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。
桃を流して捕まるなんて僕だっていやだぞ。
姉さんは一応カメラのセッティングはしたものの、なかなか判断を下す事が出来ないでいた。
二人の苦々しい顔を見てか、おばあちゃんが近づいてきた。
「ささ、やりましょう」
「えっと、大丈夫ですかね？」
「大丈夫よ、大和ちゃん。私こう見えても力持ちなのよ。家事は毎日やってるからね」
そういっておばあちゃんは上品に笑った。
「だって姉さん。やってみようか」
「分かった。ばあちゃん頑張れよ！」

姉さんは応援の言葉を送り、カメラのレンズを覗いた。
「じゃあまずは洗濯してるところを写真にとりますね」
「はい、はい」
笑顔でおばあちゃんが洗濯のシーンに使う小道具を取りにいく。
「おい、大和」
カメラを覗いた姉さんが小声で話しかける。
「川すげー濁ってんぞ。洗濯っていうかこれ」
先ほども言ったとおり、連日降った雨で水の中は1m先の視界もないほどに濁っていた。
「土砂崩れの映像とかこんな色だよな、ははっ」
と皮肉たっぷりに笑う姉さん。
「姉さんの作った味噌汁もこんな感じだよ。さ、撮っちゃおう」
もうどうでもよくなってきた。

（うわあ、白かった布が一瞬でまっ茶色だよ）
洗濯しているところを撮り終え、僕は急いで小道具の桃を持って上流へ駆け上がった。
「じゃあ、流すよー！」
大声で姉さんとおばあちゃんに合図して桃を流す。
桃はまるで流しそうめんを見ているかのような速さで川を駆け下りていった。
しかし何の偶然か、奇跡か。
うまいこと桃はおばあちゃんの方へと流れていくではないか。
おばあちゃんは桃を逃すまいとジャストタイミングでがっちりと掴んだ
溜まりに溜まった運動量がおばあちゃんに衝撃となって伝わる。
おばあちゃんは少し仰け反ったが、何とか衝撃に耐え踏ん張っている。
しかしその程度では桃の勢いは止まらなかった。
少しずつ力に押され、おばあちゃんが動き始める。

危ないと思ったときには遅かった。
何故か掴んだまま全く手を離そうとしないおばあちゃんは小道具の桃に飛び乗るような格好で桃と共に川の流れに乗ってしまったではないか。
そのまま下流へとものすごい速さで下り始める。
「おー、ばあちゃんすげーな」
「姉さん、何見てんの！追って追って！」
姉さんの懸命の走りによりなんとか川の本流に合流する前におばあちゃんを助け出すことが出来た。
姉さんのカメラには悲しそうな顔で桃に乗ったまま川を下っていく来音のおばあちゃんの姿が写っていたという。

五話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

五話目

軽い山登りを終え、戻ってきた姉さんは疲れきっていた。
あたりまえだ。
背中にはおばあちゃんを背負い、手には川の水を吸った特大の桃もどきを持って、川べりを鮭の如く上ってきたらどんな馬鹿でも疲れないはずがない。
「ごめんなさいね、重かったでしょう？」
おばあちゃんは顔にタオルをのせ仰向けに倒れこんでいる、一見すれば死体と見間違えそうな姉さんを団扇であおぎながら申し訳なさそうに謝った。
「いや、・・・ばあちゃんはさほど重くなかったけど・・・この桃いったい何が入ってるんだよ・・・」
息を切らしながら、姉さんは手元にあった桃を軽く叩いた。
パカッっという安っぽい音と共に桃が半分に割れる。
そして中からおぎゃあおぎゃあと赤ちゃんが泣きながら現れた。
と言っても、もちろんこれは偽者。ただの人形だ。声はラジカセを埋め込んで流している。こういう小道具作りも姉さんからの言い渡される雑用に含まれている。
写真なんだから音の機能はつけても意味がないんだけど、とりあえず雰囲気作りとしてつけてみた。おかげで桃とあわせてだいぶ重たくなってしまった。
「うおっ。なんだこれ、かっこいいじゃん！すげー高性能！」
姉さんは人形の片腕を掴み、ぶらぶらと揺らしながら、すごいすごいと喜んでいる。
「姉さん、壊れちゃうから優しくあつかってよ。姉さんはそういう小さいものとかすぐ壊しちゃうんだから」
姉さんはただでさえ大雑把で不器用なのに、遠慮やら手加減をしらないもんだから、人の物を勝手に触っては壊す癖がある。

あの側らにあるカメラがなぜ今まで壊れず、原型を留めたままでいられたのか。
答えはたぶんあのカメラが姉さんの所有物だったからだろう。
つまり姉さんは自分の物となると繊細にもなるし手加減も出来るのだ。
しかしそれが他人の物となると、やってはいけないということを片っ端からやってしまうような悪魔的な姉さんに変わってしまうのだ。
ちなみに奪われた僕の携帯ゲーム機は、奪われた次の日にタッチペンが画面に刺さった状態でゴミ箱に捨てられていた。

「さあ、姉さん。いつまでも人形で遊んでないで次の写真撮るよ」
「おう、そうだな。えっと次は次は・・・」
「おじいさんとおばあさんが桃をわるところだよ」
「ん、分かった。じゃあじいちゃんとばあちゃん、準備してくれ」
姉さんは三脚を使わず、カメラをしっかりと手に持って構えた。
僕は人形を桃の中へ戻すと、二つに割れたレプリカの桃を接合部分に注意してくっつける。
そして小道具の中からおもちゃの包丁を探し出し、それを電太さんに渡した。
「電太さんはこの包丁を上から桃に近づけてください。そこで一枚撮ります。その後こちらで桃を開けますので、出てきた赤ちゃんを抱き上げてもう一枚撮りますね。ここまで大丈夫ですか？」
「ああ、分かったわい」
「おばあちゃんはそれを後ろで見ていて、そのつど表情をつけてください」
「はい、はい、分かりましたよ」
「それでは一枚目撮ります、３．２．１」
シャッター音と一緒にフラッシュが光った。
撮れていなかった時のために立て続けにもう一枚姉さんはシャッターをおろした。

「大丈夫かな、姉さん」
「おう、ばっちしだ。次行くぞ」
「じゃあ少し待っててくださいね」
僕は桃を軽く上から叩いた。
しかし桃はうんともすんとも言わず、ぴくりとも動かない。
あれ、おかしいな・・・もう一度叩いてみる。
その後何度か叩いてみたが桃は一切反応しなかった。
「おーい、大和ーまだかよー」
「ちょっと待って姉さん、桃が開かなくなっちゃったんだよ」
「さっきはちゃんと開いてたろー」
「う、うん、そうなんだけど・・・」
接合部分がうまくかみ合っていなかったのかな。
「まーだーかー」
「ちょっと待ってよ、姉さん」
「これを割ればええんか？」
たまらずに口をはさんだのは電太さんだった。
「ええ、ちょっと開かなくなってしまって」
「大和くんや、少しどいとれ」
そういって左手で僕を桃から遠ざける。
電太さんは手に持っていたおもちゃの包丁を両手で握りなおし、桃に対して一直線に振り下ろした。
スパン
この音を聞くのは二度目だ。一度目は山で目の前の木が倒れる寸前に聞いた。
ずずずっと言う音とともに桃がゆっくりと真っ二つに割れる。
まさにぱっかりという感じで桃が割れた。
「おお、やっぱじいちゃんすげー！」
姉さんはカメラを構えながら切れた桃と電太さんの包丁を写真に写す。
「むかーし、おじいさんはね、軍隊にいた頃、シベリアの山奥で、

自分の身長よりも、ずいぶんと大きな熊を、刀で切ったらしいの。
それで、おじいさんには切れないものはないって、周りの人から言われていたの。宮元武蔵の、生まれ変わりなんて、言われてたときも、あったわ。」
おばあちゃんは窓から見える遠くの空を覗き込みながら、懐かしげに語った。
「す、すごい・・・」
僕も思わず賞賛の言葉を送りながら、桃を覗き込んだ。
しかしそこで喜んでばかりもいられないことに気がついた。
「お・・おぎ・・・おぎぃ・・・・おぎぎぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ」
すっかり忘れていた。
桃の中には赤ちゃんが入っているんだった。
電太さんの包丁は音を出す機材をかすめていたものの、赤ちゃんも桃と同様にまっぷたつにしていた。
姉さんもそれに気がついたのか真っ二つになった残骸の片方を取り出してぶらぶらとぶらさげる。
「こいつの名前決めたよ、大和」
「とりあえず言ってみてよ」
「チャックー。きっと体が半分になっても赤いナイフで追ってくるぜ」
「急いでティファニーって名前の花嫁を用意してあげなきゃね・・・」
「真っ二つでも寺に収めてくれっかなあ・・・」
どうかチャックーに危ないものが取り付きませんように。
安らかに眠れチャックー。
ついでに真っ二つにしたのは電太さんだからな。
そこんとこ間違えるなよ。
「いや、ほんとかっこよかったっす！おじいさん！」
後ろでは手に包丁を持ったままの電太さんが、どんな状況でも爽や

かな岩雄くんの褒め殺しにあっていた。

「すまんのう、大和くん。入っとるなんて知らんかったんじゃ」

「いいんですよ、あの場面はこっちで赤ちゃんの写真いれときますんで」

姉さんが簡易手術といって、セロテープで止めたチャックーを写真で撮ったものの、どう見ても心霊写真なのでボツにすることにした。

「みなさん、気を取り直していきましょう。次は・・・おっと」

肝心なことを忘れていた。

衣装に着替えるよう岩雄くんに伝えていなかった。

「姉さん、主人公の服どこいった?」

「ああ、あれな。ここだよほら」

そういって姉さんはひときわ大きな袋の中から衣装を取り出して僕に渡した。

「ごめん姉さん。ついでに岩雄くんにそれ渡しておいてくれない?」

衣装を姉さんに返そうとする。

「何言ってんだお前」

「へ?何って、だからこの衣装を」

「それはお前が着るんだよ」

「え?」

何の事だか分からず、僕の思考は一瞬止まってしまった。

「主人公役のやつな、私から断っといたわ」

姉さんは口のはしを吊り上げ、いじわるそうに笑った。

「え!?どういうこと岩雄くんは来てるじゃないか」

「岩雄は主人公とは違うんだよ、だいたい岩雄は主人公って顔じゃねえだろ」

それに異論はない。ごもっともな意見だが、それでは一体どういうことなんだ?

「だったら誰が主人公役をやるのさ」

「お前しかいないだろ?男で主人公役の年齢のやつなんて他にどこ

にいる？」
あまりのことになかなか頭が回転してくれない。ようやく飲み込めたのは何故か自分が主人公役で写真を撮られる状況にあるということくらい。
「僕？無理だよ。無理無理」
「私は車の中で言ったよな？もし何かミスがあればお前の体で払ってもらうって。払ってもらおうじゃないか。まさに今！」
唖然とした。この人は一体何を言っているんだ。
「まあ、そういうことだから早く着替えろよ。私はお前がその服を着ているところを見たいんだ」
また悪そうな微笑を浮かべながら、姉さんは指で四角をつくり、そこから僕のことを覗いた。
姉さんの見たいとは、すなわちやれ。
こうなると逆らう事は出来ないのだ。

「大変な事になったなあ、だいたいよく考えたらこれって僕のミスでも何でもないじゃないか」
ぶつくさと文句を言いながら、とりあえず衣装に着替える。
ピロリロリ♪
聞き覚えのあるメロディがどこからか聞こえてきた。
（壁の中・・・？）
なおも流れ続けるメロディに耳を傾ける。
あれ、これって僕の携帯の着信音じゃないか？でも、何で！？
「そうだ、わるい大和。大和の携帯電話、壁に詰めちゃった。何だか楽しくなって」
「何でそんなことしたの！？えっと、ここだっけ。姉さんがポテトチップスのゴミを詰めてたのは・・・取り出しづらいなあ、もう。んー、よし取れた！もしもし？」
耳元からは何度か聞いたことのある声。
「あ、はい。そうですか、分かりました。お願いします」

「大和、何の電話だ？」
「あれがもうすぐ届くって」
「ああ、ちょうどいいな。それならちゃっちゃと撮ってしまうか」
姉さんは民家の前に走って三脚を立てにいき、カメラを向ける。
「電太さんとおばあちゃんは玄関の前に立って、手を振って送り出す感じでお願いします」
「はい、はい、分かりましたよ大和ちゃん」
最後に僕はきびだんごと書かれた袋を腰に下げ、カメラの前に立った。
「・・・・」
「おい、大和。秒読み」
「僕がやるの！？」
「あたりまえだろ。お前以外誰がやるんだよ」
（自分でやるって恥ずかしい・・・）
「ぐ・・・分かったよもう・・・。それじゃあいくよ、３．２．１．」

六話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

六話目

「はい、では今日中にお電話いただければ回収に伺いますので。ええ、ここですね。はい」
「はい、よろしくお願いします。ありがとうございました・・・」
ブロロロロ
木の生い茂った深い緑の世界に不快な黒の排気ガスを巻き上げながら、トラックは大小二つのゲージを残し去っていった。
小さい方のゲージからはここに着いた当初からゲージをつつくような音や、独特の鳴き声がひっきりなしに聞こえてくる。
対照的に、大きいほうのゲージは本当に中身が入っているのかと心配になるほど物音一つ立てなかった。
「お、届いた！届いた！」
一旦カメラを置いてきた姉さんが、元旦にお年玉袋の中身を確認する子供のような顔で小さい方のゲージを覗き込んだ。
しかし表情は一転する。
「おい大和、何だこれ」
「鳥ー・・・だよね」
「鳥って言ったって、こいつは全然違うだろ」
流石の姉さんも言葉を詰まらせたが、ゆっくりと口を開いた。
「こいつはどう見たってニワトリだろ」
「そうだね。正真正銘、何処に出しても恥ずかしくない程のニワトリだね」
姉さんはニワトリと僕、交互に視線を送りながら、どんな表情をしていいのか悩んでいるようだった。
「姉さん、怒る前にこれだけは聞いて欲しいんだ。今時、キジなんておいそれと簡単には借りられないんだって。それでさ、僕も困っちゃって業者の人に聞いたんだよ。鳥なら他に何がレンタルできますかって。そうしたらさ、ペンギンかニワトリだって言うじゃない

か。だったらニワトリの方がまだそれっぽいじゃない？」
「いや、だけどさ。もうニワトリかペンギンの二択なら私はペンギンの方がよかったよ」
「ペンギンは料金が高いからどっち道、無理だったんだよねーははは」
僕はたまらず空笑いを浮かべる。
姉さんは顔を引きつらせながら大きい方のゲージを覗いた。
「お、こっちはちゃんとした犬じゃないか・・・ちょっとでかいなあ」
姉さんは僕が手に持っていた業者からの資料をひったくるように奪い取った。
「えっと、なになに。グレートピレニーズ。名前はスモールか。どこがだよ、すげえでかいぞ」
確かにと思う。何を思ってスモールとつけたのか気になるな。
「じゃあ私はこいつら見てるから。それ、岩雄に渡してこいよ」
「うん・・・いってくるよ」
僕は業者から渡されていた箱を持って岩雄くんの待つ民家へと入っていった。

岩雄くんは休憩時間の間も、熱心に自分の台本を読んでいた。
台本といっても台詞があるわけでもなく、自分の撮影されるシーンが大まかに書かれた程度の物である。
「岩雄くん、届いたよ」
僕はハムスターがひまわりの種を食べる時みたいに体を丸くして台本を読んでいる岩雄くんに、業者から預かった荷物を手渡した。
「あ、はいっす。あり（がとうご）ざいます！」
今まで溜めていた力を解放するかのように、全身全霊で返事をかえす岩雄くん。
「岩雄くんさ・・・こうして聞くのは失礼かもしれないけど・・・大丈夫？」

何を言われているのかさっぱり分からない風の岩雄くんが首をかしげた。
猿っぽい岩雄くんの顔がまさに猿になってしまう。
「えっと・・・大丈夫、ですか？何がです？」
「岩雄くん、猿として登録されているよ」
どうして今日この場所に岩雄くんがいるのか。
それは主人公役として派遣されたからではない。
彼は猿役として、今日この時間に、ここにいるのだ。
岩雄くんはなんだそのことか、と疑問がなくなりさっぱりとした顔で答える。
「そうっすね、でもこのバイト給料がたくさん貰えるんすよ！」
岩雄くんがそう言って親指と中指と薬指をくっつけ、指でキツネを作った。
（たぶん、お金を表現したかったんだろうなあ）
確かに人間の言葉を理解する猿はどこにいったって重宝されるだろう。
世界には人間が滅んで、猿が王国を作っているような映画もある。
だったら彼は千年に一人の逸材ではないか！
・・・いやいや。その前に彼は人間じゃないか。
熱くなっといてなんだが、人間の言葉を理解するのは当たり前だし。
「まあ、岩雄がいいんならそれでいいじゃないか」
いつの間にかやって来た姉さんが岩雄くんの持っていた箱から茶色い全身タイツを取り出す。
「でもさ、姉さん」
「うるせえ。こいつにも事情があるんだろ。いいからさっさと着替えろよ」
姉さんは全身タイツを岩雄に渡すと手をひらひらと振りながら表に出て行った。
「おい、こいつはどういうことだ」

とりあえず撮る前にお供になるはずの三匹（二匹＋一人？）を並べてみる。
「猿が一番それっぽいじゃないか」
興奮状態でゲージから出せないニワトリは論外。
種類はあってる犬だが、真っ白で大きく、やる気がないのかベロを出したまま寝転がって動かない。
「はい、ありざいます！いや、ウッキー！」
結果的にカメラマンにお礼の言えるこの全身タイツの猿が一番近づいてしまったのだ。
「おし、いいぞ猿。おい、大和、取ってきたか？」
「う、うん」
僕はさっきクーラーボックスから取り出したばかりのお団子を腰の袋に詰めた。
「まずはそこのうるさいニワトリからいくぞ」
「元気のあるうちに片付けときたいもんね・・・」
いまだにゲージの中で大暴れしているニワトリ。
誰が寝ているわけでもないのに鳴きやむことはない。
「大和くんや、少し静かにさせてくれんか。うるさくて昼寝もできやせん」
民家の方から電太さんの声が聞こえてきた。
寝てたか、おじいちゃん。
「姉さん、どうやって写真撮ろうか」
「お前が抱えとくしかないんじゃないか？」
「やっぱりそうかー・・・」
正直に言えば怖かった。
ニワトリがじゃない。暴れているニワトリがだ。
僕は緑色の服を着た人が冒険する伝説のゲームで、暴れているニワトリがどんな敵よりも恐ろしいということを知っている。
彼らは何匹も何匹も現れて僕のハートを奪っていくんだ。
恐る恐る近づく僕を見て、ニワトリはより一層暴れ始めた。

「無理だよ、姉さん」
泣き言をこぼす僕を見かねて、姉さんが近づいていく。
「ほーら、ほらほらほら」
おもむろにニワトリの前でトンボを捕まえる時のように指をくるくると回す姉さん。
すると先ほどまであんなにうるさかったニワトリが嘘のように静かになってしまった。
姉さんは豪快に笑いながら、
「ははははっ、こいつ馬鹿だ！」
と勝ち誇っていた。
なるほど、馬鹿はこうすれば静かになるのか。覚えておいて、今度姉さんに使おう。
僕は静かになったニワトリを抱え、カメラの前に立った。
そして腰の巾着から団子を一つ取り出す。
途端、さっきまで死んだように静かだったニワトリが息を吹き返し、また暴れ始める。
「姉さん、助けて！」
ニワトリが腕の中で暴れてそこらじゅうに羽が飛び散る。
「もうそのまま撮るぞ！３．２．１」
カシャカシャと何枚もシャッターを切っていく姉さん。
「よし、いいぞ。もういれろ！」
僕はゲージの中にニワトリを投げ込んだ。
「大和、すでに鬼と一戦交えたような格好になってんぞ。あっはっは」
ニワトリの爪で自作の服はところどころ破れ、汗だくになった僕を笑う姉さん。
「よし、このままの流れでパンパンと撮っちゃうぞ」
鬼か、この人は。
リードもつけていないのに逃げ出すそぶりすら見せないスモール。

「おい、お前やる気あんのか？」
姉さんが軽く頭をはたいてもスモールのあごが地面から離れることはない。
「おい、スモウ、スモウ、おい立てスモウ」
すでに名前を忘れた姉さんによって改名させられたスモール改めスモウ。
でかいし、そっちの方が似合ってる気はしなくもない。
「ヨガッヨガッ！」
「それは別人だよ、姉さん・・・」
僕はさっき出したニワトリの団子をスモールの鼻に近づけた。
クンクンと入念ににおいを嗅ぐスモール。
いきなりピクンと跳ねると、立ち上がりお座りをしたのだ。
「お、現金なやつだ」
「姉さん、犬って団子食べていいのかな？」
犬にネギやチョコをあげてはいけないとよく聞く。
団子はどうなのだろうか。
「んー、よく知らないけど喉につまりそうだしなあ」
そう言いながらも姉さんは団子をスモールの口元まで持ってくる。
パクッ
スモールは一口で団子を咥えると僕たちの手の届かないところまで移動し、口から吐き出した。
そして吐き出した団子を何回かに分けて少しずつたいらげている。
「お、食べた。大丈夫なんじゃん？」
姉さんは巾着袋に残っていた2つの団子を取り、スモールのところへ持っていく。
「おい、このまま撮るぞ。こい」
そういって三脚を移動させてカメラのセッティングを始めた。
おいしそうに、少しずつ少しずつ食べるスモール。
「おい、秒読み」
「あ、うん。3．2．1」

カシャ
実に満足そうなスモールがそこには写っていた。
「ってことで団子はなくなったんだけど・・・」
「いいっすよ！」
その後、岩雄くんとの笑顔のツーショット写真を撮り、ここに打倒鬼パーティーが完成しましたとさ。

七話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

七話目

空がまたたく間にオレンジ色に染まっていく。
日はすでに沈みかけ、森の中がかすかにざわつき始める。
昼頃からはじめた撮影も、そろそろ時間切れのようだ。
初日のノルマだった動物を仲間にする場面までは撮影できたので、まあ合格点といったところだろう。
あとは場所を変え明日いよいよ、鬼の住む島で決戦というシーンを撮ることになっている。
この場面は、お話の中で一番の盛り上がりのあるシーンで、大事なシーンだ。
だからこそ場所選びにもこだわって、わざわざボートを借りて無人島まで行くようセッティングしてある。
「それなら断っといたぞ。」
姉さんはその一言で僕のこだわりを一瞬にして葬り去った。
「なんてことするんだよ、姉さん！明日の鬼の住む島の撮影はどうするのさ！」
「大丈夫だ、明日は撮影しなーい」
「へ？」
姉さんは不敵な笑みを浮かべ、僕のかばんから勝手に拝借してきたスケジュール帳を開いた。
「私たちが今日泊まるはずの旅館。あの旅館の予約をいれたのは誰だったかな？」
「えっと・・・姉さんだよ」
僕と姉さんが宿泊場所の候補を決めていた時のことを思い出してみる。露天風呂がないと嫌だとかマッサージがないと嫌だとか姉さんが駄々をこねたので、旅館の事はすべて姉さんに任せたんだった。
後日、日付を決めた後に予約までしてくれたって言うから安心してたんだけど、まさか・・・。

「あれは真っ赤な嘘だ！今日、私たちが予約している旅館なんて世界に1軒も存在しない！」
姉さんは握りこぶしを突き上げながら叫んだ。
「馬鹿、姉さんの馬鹿！なんてことしてくれたんだよ！」
「馬？何を言っているんだ大和。まあ、そう焦るな。私に秘策があるんだ」
しまった、姉さんがまた僕の言葉は最初の一文字しか聞こえないモードに入ってしまっている。
「一応聞くよ、秘策って何さ」
姉さんは待ってましたと言わんばかりに上機嫌な顔になり、
「・・・今日、一日で撮り終えてしまえばいいんだよ」
至極当然な事を言った。
言い終えた姉さんは腕を広げ、聞こえてくるはずのない賞賛の声と拍手を待ち続ける。
「それで？」
「・・・それでって何だ？」
「鬼はどうすんのさ」
「ん、そのことか。それも大丈夫だ、ここまで私の計算通りに来ているから」
姉さんはちらっと自分の腕にはめている腕時計に目を落とす。
「じゃあ、私は少し準備があるから」
そういって話を勝手に終わらせ姉さんは一人で車の方に歩いて行ってしまった。
僕は自由奔放な姉さんが車の中に消えた後も、思考をめぐらせ続ける。
最悪今日は、この民家に一泊だな。
でもこの家はあくまで撮影のためのセットであって、人が泊まれるようにはなっていない。
毛布や布団ぐらいはあるかもしれないが、暖房なんてものは一切なく、隙間風だって容赦なく入ってくる。

山の朝は寒そうだなあ、なんて考えていると部屋の中にいたはずのおばあちゃんが外に出てきていた。
そばに電太さんの姿はない。恐らくまだ中で寝ているのだろう。
「どうしたん、だい？」
おばあちゃんはしわくちゃの手で僕の両手を包み込みながら、声をかけた。
「いや、姉さんがめちゃくちゃして困ってるんですよ」
「へえ、そうなのかい」
おっほっほと笑うおばあちゃん。
「それはね、大和ちゃんが、それほどお姉さんのことを、心配しているってことなのよ。喧嘩するほど仲がよい、ともいうでしょ？」
「喧嘩ってほどのことでもないんですけどね。おばあちゃんと電太さんほど仲良くはないですよ」
「あら、そんなことないわよ？実は私たち、そんなに仲良くないのよ。家の中でも、あまりお話、しないのよ。夫婦も演じてる、って感じかしらね。」
意外な答えが返ってきて僕は動揺してしまった。今日だけだが、はたから見ればとても仲のよい熟年夫婦だと思ったのだが、そういうわけでもないらしい。
「そうなんですか」
「ええ、たぶんあっちも、私のことなんて、もうなんとも思ってないと、思うわ」
僕は少し考え込み、そして口を開いた。
「・・・でもそれは違うと思いますよ」
「あら、そう？何故そう思うの、大和ちゃん？」
「だって何でも斬ることのできる電太さんが切っていない縁なんだから、それはすごく強い縁なんだと思いますよ」
僕は思ったことをありのままの言葉で伝えた。
おばあさんはにっこりとした表情を崩さないまま少し黙り込み、
「そうね、ありがとう大和ちゃん」

手をしっかりと握って、同じように微笑んだ。

森の中に二つの光が灯った。
その光はどんどん近づいてきて、車のヘッドライトだと分かったのは車体のすべてがお目見えした時だった。それほどに森は暗闇に包まれていた。
バタン。
車の扉が開き、男が五人降りてくる。
五人とも見るからに屈強で、黒スーツにサングラスという格好。
まさかこんな山奥でそのスジの人に会うと思っていなかった僕は混乱して言葉が出てこない。
足が小刻みに振るえ、冷や汗がにじみでる。
その時、五人の先頭にいた男が口を開いた。
「監督さんはどこにいらっしゃいますか」
その声からは敵意というか、相手を脅かそうという意思は感じられなかった。
僕はごくりとツバを飲み込み、乾ききった喉を潤すとなんとかひねり出す様に口から言葉を発した。
「えっと、監督ですか？」
「はい」
この辺りに工事現場はないし、サッカーの練習場だってない。
監督というとやはり僕たちの撮影に関係のある監督のことなのだろう。
「とりあえず僕がそうなりますけど」
と言っても助監督だけど。
「ああ、あなたがそうでしたか。これは失礼」
そういってサングラスをはずし、気さくに握手を求めてくる。
「いやーお若くて気がつかずご無礼を。私こういうもので」
そういってスーツの胸元から名刺をとり出した。
「あー・・・なるほど。そうでしたか」

真っ黒に塗られた名刺の右上に白文字で悪役事務所と書いてあった。
この事務所は怖そうな人を専門に派遣しているところで、この世界ではよく知られている。
こわもての人が多く在籍していて、最近ではスタントにも力をいれているらしい。
今回この事務所には鬼役の人材を頼んでいた。
「すいません。少し待っていてもらっていいですか」
僕は姉さんを呼びに車に駆け寄った。
真っ暗で中はよく見えないが、中で何かがもぞもぞと動いている。
「姉さん、鬼役の人達が到着したよ」
そういって車のドアに手をかけるが、中から鍵がかかっていて開かない。
窓のところをこんこんとノックする。
「開けんな大和、ちょっと待ってろ、殺すぞ！」
中からドスの利いた声が返ってくる。
僕は驚いて真後ろに飛びのき、尻餅ついてしまった。
「おい、今の声って・・・」
「すごい迫力だったな」
「監督にあんな態度をとれるなんて、車の中の人物は何者だ？」
「もしかして本当にそっち系の人か・・・？」
「監督が姉さんって言ってたしな」
「俺たち見かけはこんなだけど本物はやばいよな」
「とりあえず逆らわないほうが良さそうだな」
悪役事務所の人達が口々にあらぬことを言っている。
鍵の開く音がして、姉さんが悠然と登場した。
「姉さん、こちらの皆さんが鬼役の方々です」
「おうおう、諸君。今日はしっかりと頼むぞ」
さっきの演説ごっこがいまいち抜けていない姉さんが大物風を気取った挨拶をする。
（間違いない、彼女はソッチ系の人だ）

鬼役の方々はお互いに目で合図をして確認をとりあうと、
「あねさん、今日はよろしくおねがいします！」
大きな声で挨拶をした。
「おお、元気じゃねえか。こちらこそよろしくな」
いつの間にか姉さんは鬼たちの心を完全に掴んでいた。

「つっこむの遅くなったけど、その格好なんなの」
「何ってなんだよ」
姉さんは小道具の中にあった金棒を持ち上げ、背中の手の届かない場所をかいている。
「その衣装のことだよ。競艇？」
「何言ってんだよ。この格好見れば分かるだろ。今から私は鬼だ」
全身黒タイツで、トラ柄のパンツをはき、頭には鬼の角のついたカチューシャをしている。
「やっぱり姉さんの本当の姿は鬼だったんだ！」
昔からこんな残虐な人が人間のはずないと思ってたんだ。あと何回変身を残しているんだろう。
「違うわ、馬鹿。それよりよく見ろ、どこからどう見たって完璧な鬼じゃないか？我ながら惚れ惚れする鬼っぷりだ」
鏡を振り回しながら色んな角度から自分を映す姉さん。
まあね、あなたの配下の鬼たちに比べれば姉さんはずっと鬼らしい鬼だよ。
つい先ほど到着した姉さんの配下である鬼を演じる悪役事務所の人達はサングラスにスーツ姿。
鬼らしいところといえば、姉さんが画用紙とテープで作った鬼の角を頭につけているところぐらいなものだ。
悪役事務所に連絡するところまではできた姉さんも、鬼役の衣装が外部発注だってことまで頭が回らず、このような奇怪な鬼たちを作りあげてしまった。
「あねさん、お茶をどうぞ」

「おう」
いつの間にかボスらしい立ち回りも身についた姉さんが、配下の鬼から受け取ったお茶をずずずっと喉に流し込む。
「それよりもう外真っ暗だよ。こんな暗さじゃフラッシュたいたって無駄でしょ、撮影どうすんのさ」
「暗いなら家の中で撮るしかないだろ」
「え？」
思わず素っ頓狂な声を出してしまった。
確かに家の中なら持ち込んだ照明機材で、撮影できる明るさくらいにはなるかもしれない。
でも、
「鬼が家の中にいるの？」
そんな馬鹿な。
「鬼の方から攻め込んできたってことにすればいいだろ」
なんてご都合主義。
姉さんの頭の中のストーリーでは、鬼が一市民による鬼退治の計画を嗅ぎつけ、わざわざ敵の本陣まで出向いたとでも言うのだろうか。
なんて情報戦に長けた鬼なんだ。
「そんな簡単に改変していいの？」
「しょうがねえじゃん。外暗くて取れないんだし」
姉さんはまったく悪びれるそぶりもない。
「姉さんが鬼役として出るんだったら、誰がカメラ撮るのさ。僕も無理だよ？」
だって主人公だし。姉さん率いる鬼たちを実家で迎え撃たなきゃいけないし。
「タイマーで連写撮影だ、それでいこう」
姉さんはぽんと胸の前で手を叩き、さっさとカメラをいじりはじめる。
本当に適当だなあ。
「じゃあちょっと準備するから待ってろ」

意気揚々とカメラのセッティングを開始した姉さんだったが、連写機能とタイマー機能、いきなり二つを相手することになりだいぶてこずっているようだ。
「大和さん、大和さん」
ぼーっとしていた僕に岩雄くんが突然話しかけてきた。
「やばくないですか、梅さんの格好」
岩雄くんは悪戦苦闘する姉さんを見ながら頬を赤らめている。
「何が？」
「ほら見てくださいよ。胸とかぴったりくっついて。梅さんってすごい巨乳じゃないですか。」
そう言われてもう一度姉さんの方を見る。ああ、確かに。姉さんは性格は悪いがスタイルは弟の僕から見てもいいと思う。出るとこ出てるし。さらに、全身タイツだから体のラインがくっきりでてしまっている。
確かにあれは反則的だ。
「岩雄くんは巨乳が好きなの？」
「巨乳がいいですねー。僕はよく海外に行くんですけど、梅さんのは外人並にでかいですよ」
岩雄くんは嬉しそうに語った。
「そういえば大和さん。大和さんはずっと梅さんのことを姉さんと呼んでいますが、もしかして大和さんと梅さんって姉妹なんですか？」
「ああ、そういえばちゃんと紹介するって言ってまだしてなかったね。まあ一応姉妹だよ。性格も何もかも違うけどね」
「え！やっぱりそうだったんですか？うわー、大和さんのお姉さんなのに失礼なことを言ってしまったなー」
岩雄くんは独り言のように自分のミスを責めはじめた。
自分の姉をそういう目で見られるとだいぶ引く。
しかし僕の中で猿として登録されていた岩雄くんはすでにこれ以上離れることの出来ない距離まで離れているのでこれ以上引く事はな

い。
「失礼ついでに言いますけど、全然似てないですね」
全然失礼じゃないぞ岩雄くん。その通り全く似てないんだ。僕は似てはいけないんだ。
「おっし、テストいくぞー」
岩雄くんと喋ってる間にセッティングを終えた姉さんが声を上げた。
「えっと確か大和さんの苗字が湖蘭だから・・・湖蘭梅さんかー」
「あっ」
まずいと思ったときには手遅れだった。その辺の説明を全くしていなかった。
「おい、猿なんか言ったか」
顔を伏せた姉さんが岩雄くんに少しずつ近づいていく。
「あ、えっと。大和さんと姉妹ならフルネームは湖蘭梅さんなんだなーと。」
この辺で岩雄くんも空気がおかしくなったことに気がついた。
しかし遅すぎた。
まあ、でかい声で二回も言ったら聞き間違いでは、すまないわな。
「だれがご飯ウメーだあああああああああ」
逆上して鬼神とかした姉さんは岩雄くんを間髪いれずに殴り飛ばした。
「あり（がとうご）ざいまあああああああああああす」
岩雄くんはまるで重力が横を向いたのではないかと思うくらい軽々と吹き飛び壁にはりついた。
「姉さんやめて！」
壁が、土壁が崩れる！弁償できないよ！
壁にぶつかってもなお、重力に逆らいながら浮き続けていた岩雄くんがとうとう、ずるずると壁伝いに床に落ちた。
一目で分かる。意識はない。
「お前もだ大和ー」
姉さんは気を失っている相手は襲わない。

なぜならそれ以上やれば相手が死ぬからだ。
しかし当然この程度では怒りの収まらない姉さん。
その怒りの矛先は僕に向いた。
「僕は何も言ってないじゃないか！」
「モウマンターイ！」
そこは問答無用だよ、姉さん。とつっこんでいる暇はなさそうだ。
「ほーらほーら姉さん」
僕は先ほど知った馬鹿を止める方法を実践する。
トンボを捕まえる時のように指を姉さんの眼の前でくるくると回す。
当然それを見た姉さんは、
「なんのつもりだおらあああああああ」
そりゃそうだよね。
僕もあえ無く、ボコボコにされました。

その後の写真には対決する前から立っているのがやっとなほどの怪我を負った主人公と意識なく壁に叩きつけられている猿。
家の中に動物をいれる訳にもいかなかったので犬とニワトリの姿はない。
寸前の暴力事件を見て顔面蒼白になったスーツ姿の鬼を従え高笑いをかます姉さん。
その光景を見てなお微笑みを忘れないおばあちゃんと、我関せずと普通に眠ったままの電太さん。
散々な写真ばかりだった

◇

「姉さん、それ以上は！岩雄くんが死んじゃうよ！」
「おい、起きろ大和」
「はっ　夢か」
まさか岩雄くんが姉さんに１２回体を畳まれて壁に埋められる夢を

見るなんて。
「で、どうだった　今回の本の売れ行きは」
「当然いまいちだよ。それでも少しは売れてることのほうに驚きだね」
「いやー、好評だったぞ一部には」
「一部ってどこさ」
「ひなた」
「あー、そっか。・・・ならいいか」
「ああ、オールオッケーだ」
「・・・って全然オッケーじゃないよ！来月の食費どうすんのさ！」
「心配すんな」
姉さんは大きなダンボールを二つ、ドアの向こうから持ってきた。
一つ目のダンボールを開ける。
中には気持ち悪い色の果物がつまっていた。
「これは猿雄から。あと三箱これがあるぞ、南国の果物だってよ」
おしいけど、名前が違うぞ姉さん。
「なんで岩雄くんからそんなところの果物が届いたの？」
「なんか旅すんのが趣味らしいぞ。」
なるほど。岩雄くんは今現地にいるのか。
へえ、猿顔の岩雄くんが旅ねえ。
猿岩・・・
「ロバ連れて旅してそうだよな」
「姉さんそれは別のコンビだよ」
もう一つの箱はなんだろう。
「じいちゃんとばあちゃんからだ。息子の会社の試供品だってよ」
じいちゃん・・・ああ来音さん夫婦のことか。
「大和ちゃんにだってよ、よかったな」
「ああ、うん」
中を覗いてみると箱いっぱいに新製品の歯磨き粉が詰まっていた。
「じいちゃんたちがくれたんだ残さずに全部食べるんだぞ」

「分かって・・・え？」
「姉さんは大和がこれ全部食べてるところ見たいぞ」
姉さんは豪快に笑った。

七話目（後書き）

1話目おわり　2話目につづく

2、一話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

2、一話目

「姉さん」
「何だよ、うわっ顔怖い。どうした大和」
「どうしたじゃないよ。何であいつがここにいるのさ」
「何でって、呼んだからに決まってるじゃん。今回の撮影は必要だろ、女の子」
「だからって姉さんは何でよりによってあいつを呼んだのさ！」

話はまず二週間前にさかのぼる。

・
・
・

僕が初めて出演した絵本が発売され二ヶ月。
町では以前よりも多くのシャッターを降ろした本屋さんを見かけるようになった。
僕はそれでも負けじと続けている数少ない書店をまわり、どうにか本を置かせてもらえるよう交渉する毎日を送っていた。
しかし現実は厳しい。
「こんなもの置く余裕はない」だとか、「絵本のくせに子供に見せられない」、「鬼の子の写真集なら置いてもいい」など、ごもっともな意見と共につき返されることがほとんどだ。
それでも根気よく交渉を続け、少しずつだが置かせてもらえる書店も見つかった。
そんな時にまた、姉さんのわがままが始まった。
「よし、次の作品を撮るぞ」
姉さんはベッド代わりに使っていたソファーから飛び起き、開口一番叫んだ。
「何か言った？姉さん」

いつもの持病の発作なので僕は聞こえないふりをして軽くあしらう。
「大和、私は決めた。次の作品を撮る」
「あ、そう。姉さん頑張って」
「次の作品をとーるーぞー、やーまーとー」
姉さんを無視し、ディスプレイを覗き込みながらキーを叩く。
「・・・」
「やーまーとー」
「・・・」
「や・ま・と、お・ね・が・い・ハート♪」
「駄目に決まってるだろ、姉さん」
姉さんの甘ったるい声に耐え切れなくなった僕はしょうがなく口を開いた。
「前の本を出してからまだ二ヶ月しか経ってないんだよ?新しい本を出すには少し早いよ姉さん」
「うん、でも大丈夫」
馬鹿な姉さんのために、分かりやすさを心がけて説得する僕。
しかし姉さんからは何の根拠もないくせに自信に溢れた言葉が返ってくる。
「それにこう言ったらなんだけど、前の本は鳴かず飛ばずで在庫がまだあるんだ」
僕は部屋の隅にあるダンボールから紙束を一つ取り出しながら続ける。
「今はこれを少しずつでも置いてくれる店を探した方がいいんじゃないかな」
我ながら馬鹿でも理解できる、いい説明だ。
これで流石の姉さんだって分かってくれたはず。
しかし普通の馬鹿のさらに上を行く姉さんは僕の手から自分の作った絵本を取り上げると、
「こんなもん知るかー!」
といって本を床に叩きつけた。

「何すんのさ、姉さん。これ一応売り物なんだよ！」
「うるさい！私はこんなもの知らん。私は次を撮るんだー！」
言い出すと自分のわがままが突き通るまで、ごね続ける姉さん。
「だいたい姉さんは自分のしたいことしかしないじゃないか。スケジュールの管理だって僕にやらせるし、役者の手配や場所をおさえるのだって僕じゃないか。あげく前回はそのスケジュールだって勝手に変えちゃうし・・・」
「大和、ごちゃごちゃうるさーい！」
そういってムエタイの選手ばりの蹴りを僕のお尻に叩き込んだ姉さん。
「痛い！手をあげたな、姉さん！」
「手は上げてない！」
感情的になった姉さんに言い回しは通じない。
「悔しいなら口で言い返せばいいじゃないか、なんですぐ蹴るのさ！」
「うるさーい、お前・・・口臭が爽やかなんだよ！」
「それは姉さんが歯磨き粉を食べさせたせいだろ。おかげで僕はずっと下痢だよ」
ダンボールいっぱいの歯磨き粉を消費するのに、毎日一本ずつ。二ヶ月間もこの生活が続いた僕の息は朝昼晩ずっと爽やかになってしまい、代償としてお腹がゆるくなった。
「だから私が薬買ってきてやっただろ」
「いっきに一瓶飲ませようとする馬鹿に殺されかけたよ」
絶対マネしちゃ駄目だぞ。
「くー・・・じゃあ私が全部用意したら撮っていいんだな！？」
「姉さんには無理だよ。あのまぬけな鬼たちの衣装を思い出してみなよ」
「こんちくしょー！」
姉さんは言葉で追い詰められると精神と言葉の年齢がぐっと下がり、攻撃も単調になる。

間髪いれず飛んでくる姉さんの手刀をひらりと避けた。
このくらいなら姉さんの攻撃でも避けられる。
しかし避けた先で机で腰を強打した。
「あで」
「やってやるー、うわあああああん」
号泣しながら姉さんは扉を開けて出て行ってしまった。
少し言い過ぎたかなと思ったが、こういう姉さんの急な思いつき自体はよくあることで、僕は特に気にはしていなかった。
だいたい姉さんの思いつきは企画倒れで実行にうつされることはまずない。
しかし実のところ今回の姉さんは違った。
姉さんは僕の知らないところで本当に準備をしていたのだ。
そして今日、知らぬ間に計画されていた撮影の日を迎えた。
ちなみに僕がこの撮影について、姉さんから聞いたのは早朝のこと。
もちろん何もしらず寝ていた僕は、いきなり姉さんに叩き起こされ、寝ぼけている間に車に乗せられた。そして、気がついてみればこの竹やぶに連れてこられていた。
もう誘拐だろ、これ。
姉さんから台本を受け取り、中をぱらぱらと開く。
「姉さん、ちなみに僕はこのお話に出てくるの？」
「当たり前だろ。前が好評だったし、今回も出すぞ」
「一部にね」
「ああ、ひなたにな」

で、なんやかんやありながらもう一人の出演者と顔合わせ。
そこでようやくこのお話の最初に戻る。

・　・　・

「何でここにかぐやがいるのさ」
「ひゃぇっ！」
少女は兄弟喧嘩の途中で、自分の名前がでてきたことに驚き、ぴくんと跳ね上がった。
僕はその様子を横目で見ながら、少女を指差して姉さんを問い詰めた。
「もしかして姉さん、名前がかぐやだから呼んだの？」
「おう」
姉さんは全く表情を変えず、堂々と、当然のように言ってのけた。
「選考基準は？」
「女でかぐや」
「・・・だけ？」
「おう」
呆れた。
僕は急に激しくなった頭痛と腹痛に顔を歪める。
「お、お久しぶりです、大和くん・・・」
少女は涙目になりながらも、僕の正面に立ち挨拶をした。
紹介しよう。
彼女は僕の幼馴染の菊池かぐや。
菊池家とは親同士の仲がよかったため、子供同士でよく遊んでいた。
主に姉さんが。
女同士気でもあったのか、あるいはあの姉さんと仲良くなれるほど馬鹿だったのかは知らないが、姉さんはかぐやのことを小さい頃から可愛がっていて、かぐやにとても甘い。
僕はといえばかぐやが嫌いだった。
姉さんに蛙をパンツの中に入れられたこともない。
姉さんに鼻でガムを噛んで膨らませるまで、押入れに閉じ込められたこともない。
雷雨の中、鉄のフライパンを持たせられ、外に立たされたこともな

いかぐやが、姉さんに可愛がられているのが小さい頃の僕には納得ができなかった。
だから僕は姉さんに叩かれた腹いせをかぐやにしていた。
と言っても昔から腕っ節の弱かった僕は、かぐやによく悪口を言った。
しかしかぐやはほとんど喋らないし、僕が何を言っても笑っていた。
でもそんなある日、僕はかぐやを泣かした。何を言ったかは覚えていない。そして僕は飛んできた姉さんに川原の石を高く積むまで殴られ続けた。
その日から僕はかぐやを避け、そして全く遊ばなくなった。
親同士の交流もなくなり、かぐやにあったのは中学生の時以来だ。
僕はかぐやをきっと睨み、挨拶を返さない。
「出演料もいらないって言ってくれてるんだ、文句ないだろ？お前ら一緒に出るんだから少しは仲良くしろ」
姉さんが僕の肩を掴みながら言った。
「・・・よろしく」
僕はかぐやの顔を見ないように挨拶を交わし、さっさと車に入って衣装に着替えた。

2、二話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

2、二話目

青々と育った竹が天に向かってまっすぐと伸びる。
風が吹くと揃って左右に体を揺らす姿は何か神秘的な感じだった。
「なるほど、僕はおじいさん役か」
渋い茶色の衣装とご丁寧に白髭とかつら。
僕にあそこまで言われたのがそれほどまでに悔しかったのか、姉さんはちゃんと準備をしていた。
外に着替えのできるような場所はなかったので、しょうがなく車の中で着替える。
朝、人の安らかな睡眠を妨害してくれた姉さんにいちゃもんの一つでもつけてやろうかと思ったが、車が狭くて多少時間はかかったものの、サイズもぴったりで衣装については文句のつけようがなかった。
姉さんが着替えてでてきた僕を見て、満足げに笑った。
「はっはっはっ、サイズもちょうどいい感じだな。似合ってるぞ、大和」
「僕もびっくりしたよ。姉さんやればできるじゃないか」
「いやいや、私なんかより大和の方がすごいよ。前の衣装といい何でも似合うじゃないか。ほんと何着せてもかっこいいなあ」
おじいさんの衣装が似合うってのは、少し「ん?」と思うがこれも姉さんなりの褒め言葉なのだろう。
「どうしたんだよ、姉さん。恥かしいなあ。」
「これほど写真写りの神様に愛されている男はいないぞ。どの角度から見てもすげーイケメンだ」
そういってカメラを覗きながら、僕の周りをくるくると歩きまわる姉さん。
「ははっ、本当にどうしたの姉さん。そんなに褒めても何もでないよ」

「えっ・・・」
元気だった姉さんが急に静かになった。
手足をわなわなと震わせ、視線が空中を彷徨っている。
「・・・姉さん、正直に言って。何したの」
「その衣装、後払い・・・。私、お金ない・・・どうしよう大和」
姉さんは両手を僕の肩に起き、がちがちと歯を振るわせた。
「どうしようどうしよう、早く逃げないと大和。どこか誰にも来ないような山奥へ」
「いや、衣装の代金なら会社のお金で出すけどさ・・・」
「あっ、そっか」
姉さんはふぅーとため息を吐き出し、安堵の表情を浮かべた。
しかし僕には安堵できない懸案が一つ。
「・・・姉さんもしかして僕に払わせようとしてた?」
「いや、別に」
「姉さん、嘘をついたら馬鹿になるよ」
「ぐっ・・・」
姉さんは馬鹿のくせに今以上に馬鹿になることを嫌っている。
「さあ、どっち?」
この後の姉さんの行動パターンは二つ。
「ごめんなさいいいいい、嘘つきばしたあああああ」
と言って号泣しながら謝るパターンが一つ。
もう一つは、
「うるせえ、馬鹿大和おおおおお」
と言って逆切れしながら殴りかかって事をうやむやにするパターン。
果たして姉さんはどちらの行動をとるのか。

「うるせえ、（省略
後者でした。

一方的な暴力でなかったものになった僕の疑問を置き去りにして、姉さんと僕、ついでに何故か撮影シーンもないついてきたかぐやの三人で竹やぶの奥へと入っていく。

「おい、大和。笹だ、食ってみろよ」

姉さんは頭上に無数にある笹の葉を一枚、引きちぎって僕に渡した。

「僕はパンダじゃないんだから食べられないよ。それにどちらかと言えば僕より四六時中ゴロゴロしてる姉さんの方がパンダに近いでしょ」

「大和、お前の顔にパンダみたいなあざつくるぞ？」

「・・・ごめんなさい」

姉さんとの口喧嘩は口喧嘩から最後には脅しになるから勝てたためしがない。

「っぷ」

少し後ろを歩いていたかぐやが思わず噴出した。

「・・・何笑ってんだよ」

小さい声でぼそっと呟いた。

「あ・・・えと、ごめんなさい」

かぐやは謝りながら顔を曇らせた。

「馬鹿、仲良くしろって言ったろ」

そういって姉さんは僕の頭を軽くこずく。

「・・・」

その後、気まずい空気のまま数分歩き、少し開けた場所に出たところで姉さんが足を止めた。

「よーし、ここでいいだろう。うひゃーたっかいなー」

姉さんは一際背の高い竹の頂上を見ようと、首を傾けて空を見上げた。

「姉さん、ここではどんなシーンを撮るの？」

「ああ、えっとなー」

姉さんは背負っていたリュックサックから台本を取り出しながら、

「えっと、竹を切ってる大和と光ってる竹。それと竹の中にいる赤ちゃんを見つけるシーンだな」
姉さんは台本を閉じると、またリュックから物を取り出した。
「はい、これはのこぎりと細い枝を切るようの鉈だ。んじゃまず大和が鉈で竹を切ってるとこ撮るぞ」
「姉さん、これで本当に切れるの？」
持ち上げた鉈を少し振ってみる。
「おい、気をつけろよ。それ本物なんだから。本当に切る必要はない。切ってるところを撮る」
「なるほど」
そういって僕は手に持った鉈を竹に思い切りよくつきたてた。
「よーし、それで待ってろ」
姉さんは急いで三脚をたて、カメラをセットした。
「おし、大和秒読みー」
「うん、３．２．１」
シャッターが降り、今日一枚目の写真がデータになって映し出された。
「ん、オッケー。じゃあ次光る竹」
姉さんはまた手ごろな竹を探し始める。
「姉さん、どうやって竹を光らせるの？」
「ああ、待ってろ。秘策があるんだよ」
姉さんは青いロボットがポケットから道具を取り出す時のような効果音を口で出しながら、リュックから懐中電灯を取り出した。
「テラスタメノライトー」
「ライトってそういう物だよ」
姉さんのモノマネが似てないことはさておき、それをどう使う気なのだろう。
「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｉｎ　ｂａｍｂｏｏ．」
どうやら竹の中に懐中電灯をいれて光る竹を作り出すらしい。
ちなみに姉さんは学生時代、すこぶる英語ができなかった。

それなのに使いたがる辺り、やはり馬鹿だと言える。
「どうやって中にいれるのさ」
「Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ」
いつもの姉さんよりもいらっとくるな。
姉さんは外人風（姉さんの勝手な想像）の悩み方として、ありもしないヒゲを指でこすりながら考えている。
「Ｙａｍａｔｏ，ｈｅｌｐ　ｍｅ」
早々に根をあげた。
いらっとしたので助けないことにする。
「Ｉ　ｃａｎ'ｔ　ｈｅｌｐ　ｙｏｕ」
ちなみに僕にも姉さんと同じ血が流れている訳で、英語は出来ない。
「助けて、かぐやー」
姉さんは僕を諦め、かぐやに泣きついた。
「えっえっ。ど、ど、どうしよう」
かぐやはおろおろと慌てふためいている。
「かぐやー、お姉ちゃんを助けてー大和がいじめるー」
ぐりぐりとかぐやの胸に顔をこすりつけ甘える姉さん。
それを見ていると、そろそろ助けてやるかという気分になった。
「姉さん、そこは竹だけ撮って後で合成しよう」
「そうだな、なんで早く言わないんだよ大和ー」
姉さんは嬉しそうに三脚をたてて、光っていない普通の竹を撮った。

「おし、オッケー。じゃあ私はもっと竹林の写真撮ってくるから大和はこれで竹を斜めに切っといて」
そう言って姉さんからのこぎりを手渡される。
「気をつけて切るんだぞー、じゃ後は任せたなー」
のんきに鼻歌を歌いながら姉さんは竹やぶの奥へ消えていった。
その場に残された僕とかぐや。
かぐやは気まずそうな顔で、そわそわとして落ち着きがない。
「かぐや、切れよ」

昔のように命令口調で言ってみた。
「あ、うん。分かった」
かぐやは僕の言葉に従い、女の子の手には似合わないのこぎりを持って切り始めた。
「うんしょ、あれ・・・硬いね」
かぐやは顔を上げて微笑みかけるが、僕は表情も変えないし返事もしない。
「うんしょ、うんしょ」
何分続けても、いっこうにのこぎりの刃は前に進んでいかない。
かぐやは前髪ををかき分けながら、一生懸命に手を動かしていた。
汗の雫が一滴、かぐやの顔の輪郭をつたって地面に落ちた。
それを見ていた僕は何故だか無性にいらいらしてきた。
「代われよ」
「え？」
かぐやは驚いた顔で僕を見た。
「遅いからだ、姉さんが帰ってきたときに終わってないと写真撮れないだろ」
「あ、そうだね。・・・ありがとう大和くん」
僕はのこぎりをかぐやの手から奪いきり始めた。

「・・・んで何で切れてないのさ」
帰ってきた姉さんは呆れながら僕に向かって言った。
「すっごく硬いんだよこれ」
泣き言を言うようだが本当に硬い。男の僕でも全然無理だった。
「大和くんは頑張ってくれたんだけどあのね、お姉ちゃん」
フォローをいれようとするかぐや。
「ちょっとどいてろ」
姉さんはのこぎりではなく鉈を両手で持ち、かまえた。
「確かじいちゃんの構えはこうだったかな」
姉さんの言うじいちゃんとは電太さんのことだろう。

「はっ」
姉さんはものすごい速さで鉈を斜めに振り下ろした。
すっぱりと竹が斜めに切り落とされる。
電太さんのような音は出なかったものの、見ただけでここまでできるようになるのか姉さん。
我が姉ながら恐ろしい。
姉さんは鉈を下ろし、リュックからある箱を取り出した。
その箱は何重にも紐で縛られていて、よく見ればおふだのような物が貼ってある。
「姉さんこれ何さ」
僕は箱を手にとり、よく見ようと顔に近づけた。
「おぎぎぎぎ、ぎぎ、、、ぎぎ、、、ぎゃあ」
びっくりして箱を投げ捨ててしまった。
「これまだ持ってたの」
「いや、使えるかなって思って」
「姉さん、これはもう燃やすなりお寺に持ってくなりしようよ。赤ちゃんは僕が合成でいれとくからさ」
「うん、分かった。そうする」
姉さんは箱を拾って何事もなかったかのようにリュックにおさめた。
「よし、これ撮ったら次行くぞ」
手でカメラをしっかりかまえる姉さん。
「大和、秒読み」
「3．2．1」
「あっ、今撮りながらすげー面白いジョーク思いついた」
「聞かせてもらうよ」
「今、私カメラで竹を撮ってるじゃん?これが本当の竹撮り物語ってね、ＨＡＨＡＨＡ」
僕は笑い続ける姉さんを置いて無言で車へと戻った。

2、三話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

2、三話目

車を走らせること数十分。
ちらほらと民家が見えるようになった。
道路も車が一台しか通れないような道から二車線に変わり、山を崩してつくった町のような場所に出た。
少し走ると洋風の家や、コンビニなんかも建っているのを見かけた。
姉さんに教えられたルートだと、目的地はどうやらこの町の奥。
周りより少し高い丘の上へ向かっているらしい。
「よーし、ここだ。止めろ大和」
姉さんは後部座席で前がかりになり僕に指示を出す。
止めろも何も、走っていた道は最後には一本道になり、その道もここで行き止まりだ。
よって僕たちには止まる以外の選択肢がない。
僕はブレーキを踏み、車を止めて外に出た。
「姉さん、ここなの？」
「そうだぞ、次はここで撮影する」
僕は目を丸くしながら目の前にそびえたつ建築物の全体像を必死につかもうとする。
「姉さん、これ本当に借りられたの？」
「ああ、借りられたぞ。どうだ、驚いただろう」
姉さんはえっへんと胸を張って自慢する。
「驚いたけどさ、本当に大丈夫なの？僕は嫌だよ、あとから無許可だったなんてオチは」
「なんだよ大和、素直に褒めろよ。ちゃんと許可だってとってあるって」
「ならいいけどさ、よくこんな場所、姉さんが借りられたねえ」
それはまるで武家屋敷。屋根一面にびっしりと敷き詰められた多くの瓦は見ていて壮観だ。

家の前にはずっしりとかまえた門が硬く閉ざされている。
「昔の知り合いにちょっとな。よし、行くぞー皆のものー！」
姉さんはまるで将軍が隊を動かす時のような仕草で手をあげ、僕たちを先導した。
そして大きな大きな門の前に立つと、両手でゆっくりと押し始める。
門はぎぎぎという地面と木がこすれるような音がするものの、微動だにしない。
それでも姉さんは押し続けるが、人が通れるほど門が開く事はない。
「ぐぐぐ、すげー重いぞ、この門。どうなってんだ」
姉さんは足を踏ん張らせながら両手で押し続けるが、いっこうに前に進まない。
姉さんの馬鹿力でも開かない門があるなんて、少し驚きだ。
「鍵はかかってないの？」
「いや、開いてるはずなんだがなあ・・・ちょっと本気で押してみるか」
姉さんは一度押すのをやめ、力を緩めた。
そしてその場から一、二歩下がった場所から力を込めて思いっきり押す。
門のそこかしこから木の軋むような音が聞こえた。
「あわわわわ」
ぱらぱらと落ちてきた木屑を見て、かぐやが慌てる。
僕も流石におかしいと思い、
「姉さん、もしかしてこの門は押すんじゃなくて引くんじゃないの？」
「え？何んだって、そんな馬鹿な・・・」
姉さんは門の少しだけ凸凹した場所に指をひっかけ、軽くこちらに引いた。
門は簡単に開いた。
「引っ張れるように持ち手がついてるじゃないか」
やはり姉さんはそんな馬鹿だ。

なんにせよ姉さんの馬鹿力で門が壊れなくてよかった。

僕たちはようやく開いた門をくぐり、屋敷の鍵をあけて玄関から部屋へあがった。

「うわあ、すごいなあ」

家の中にも、高そうな壷や掛け軸がそこら中に飾られている。

庭の木も丁寧に手入れされていて、池には綺麗なオレンジ色と白の鯉が優雅に泳いでいた。

「綺麗だなあ」

ぱくぱくと口を動かしながら静かに泳いでいる鯉をみていると無性に心が落ち着く。

「こどもの日までは首位か二位くらいのところにいるのに、最後は絶対五位なんだよな・・」

姉さんも違う意味で安らぎを求め、鯉を眺めている。

来年に期待しようよ。

「お、そうだ。餌あげなきゃ」

車の方に駆け出した姉さんは小さな袋を手に戻ってきた。

「ちょっとまった」

慌てて姉さんの動きを止める。

「なんだよ、大和」

「何を鯉にあげるつもりさ」

「ん、分かんない。うちの近くの池ですくった魚。小さいから食べるだろ」

「それたぶんブラックバスの稚魚だよ、入れたら池の中の生態系がめちゃくちゃになっちゃうよ」

姉さんは袋の中にいる黒っぽい小さな魚を覗き込んだ。

そして数秒考えた後、

「まあいいや」

の五文字で危険物を池に放流しようとする。

僕は姉さんを止めながら、子供にいい聞かせるように言った。

「将来的に鯉が食物連鎖の餌食になるからやめてあげて」
「ええい、うるさい。恋するものは誰にも負けない！つまり鯉にも敵はなし！勝利をその手で掴んでみせよ！」
「魚にはエラしかないから無理だよ、やめて姉さん」
僕は姉さんを取り押さえ、姉さんの（購入する直前まで僕のだった）おやつのせんべいを小さく砕いて池に投げてやることにした。

それにしても、広い家だ。
廊下は長く、部屋だって何室あるのか検討もつかない。
僕はいくつものふすまを開けながら、どんどんと奥へと進んでいく。
物は少ないが、どの部屋にも掃除が行き届いているようだ。
僕は一際派手なふすまをゆっくりと開いた。
そこはかぐやが衣装に着替えている部屋だった。
下着姿のかぐやをまじまじと見てしまう。
パンツに・・・うさぎの絵？
なんだそれ、かぐや＝月＝うさぎってか？
「きゃっ」
「うわっ」
僕は一瞬で我に返り、かぐやが叫ぶ前に慌ててふすまを閉める。
「ごご、ごめんなさい大和くん。着替えるのに手間取っちゃって。あのあの」
「馬鹿！着替えるんならこう・・・馬鹿！」
とりあえず逆ギレした僕は、かぐやをけなしてその場を離れた。
あーびっくりした。
いまだに心臓がばくばくと脈打っている。
落ち着こうとしてもなかなか鼓膜から心臓の鼓動が離れない。
このドキドキは一体何なのか。
えーっとあれだ。かぐやが叫んで姉さんが僕を殴りに来るかと思ったーのドキドキだ。
決して・・・その・・・かぐやが子供の時から変化していたのでび

っくりした訳じゃない。
頭を冷やそう。
僕は来た道を戻り、廊下へと続くふすまを開いた。
「うわ！」
またびっくりした、さっきとは違う意味で。
「お久しぶりっす」
「姉さん猿が家にあがってる。おばあさんの猿が挨拶に来てるよ。
久しぶりだって、きっと姉さんの馬鹿友達だよ」
「落ち着け、大和。岩雄だ」
姉さんが後ろからおばあさんの格好をした猿のカツラをとってみせた。
見た事のある顔、ちょうど二ヶ月前くらいに。
ああ、そうだ。何処の猿かと思えば岩雄くんじゃないか。
「ああ、久しぶり。でも何て格好してるの？」
「はい、自分はおばあさん役らしいので」
岩雄くんは着物の帯をさすりながら、恥ずかしそうに言った。
「へ？」
いまいち状況のつかめない僕は姉さんを見る。
「姉さんが呼んだの？」
「ああ、私が呼んだぞ。岩雄のギャラは安くすむからな」
姉さんはいきなり本人の前でぶっちゃけた。
僕は少し考え込み、
「あーもしかして岩雄くん、まだ猿として登録されてるんだ」
と姉さんに返す。
「人間の役者を雇うより全然安いからな、しかもこいつ果物送ってくれただろ」
何がしかもなのか分からないが、そういえばそんな事もあったな。
姉さんは食べ物の恩と恨みだけはしぶとく覚えている。
まあ、果物は姉さんがすべて食べて、僕は歯磨き粉しか口にしてないけど。

確かあの果物は南国の・・・どこだったかな。
よく見れば岩雄くんの肌は少しやけているようだった。
「少し焼けてるね、岩雄くん。何処の国に行ってたの？」
「はい、ある有名な民族のいる国に行ってたんですけど、もう少しで貢物として神様に捧げられるところでしたよ」
岩雄くんはまいったまいったと、頭をかきながら笑った。
「大変そうだねえ」
「でも撮影なら、いつでも呼んでください。梅さんが呼ぶならいつだって駆けつけますから」
岩雄くんは姉さんにウインクをしながら言った。
しかし残念、姉さんは見ていない。
そこにかぐやが着慣れぬ着物で入ってきた。
「ちゃんと着れてるかな、お姉ちゃん」
「いいんじゃないか。どうだ、猿。かぐや可愛いだろ？」
「うお！梅さんこの方誰ですか！？」
猿のテンションが急激にあがった。
「ああ、言ってなかったな。こいつかぐや。で、こっちが猿」
簡単すぎる説明を両者にする姉さん。
「かぐやさんか、可憐だ」
「えっと・・・おさるさん？」
かぐやの頭の上にクエスチョンマークがいくつも並ぶ。
「自分岩雄ッス　よろしくおなしゃす」
「あ、はい。よろしくお願いします」
背と声の大きさに圧倒されて、少しおびえているかぐや。
その様子を見ていた僕とかぐやの目が合う。
さっきかぐやが着替えているところを偶発的に、事故で、間違えて、覗いてしまったこともあり、僕はかぐやの顔を直視することができずにうつむいた。
かぐやも顔を引きつらせている。
「じゃあ全員着替えた事だし、かぐや一家の家族写真撮るぞ」

そういって姉さんは、三人を並ばせてカメラの前に立たせる。
「おい、大和とかぐやもっと近づけ、入らないぞ。猿、お前は近づきすぎだこの馬鹿」
僕はしょうがなく2歩3歩横にずれた。
「よし、撮るぞ。秒読みー」
「ん、3．2．1」

「じゃあ猿、お前はすぐ着替えて来い」
「おっす、梅さん」
岩雄くんは慌ててカツラをとりながら部屋を出て行った。
おばあさんだけ衣装変えるのかな。
「大和ちょっとこっちこい」
姉さんが手招きして僕を呼び寄せる。
「何、姉さん」
「次のシーンで男が持ってきた無理難題のお宝を出すだろ。それで何を用意すればいいのか分からなかったから色々候補を持ってきたんだ。だから大和、見て選んでくれ」
姉さんは持参した箱の中をごそごそとさぐり僕の目の前に並べ始める。
「え・・いいけど・・・何これ」
「ああ、これな。これは5人組の女子高生バンドが出てくる映画の半券と引き換えにもらえる生フィルムだよ。んでこれが当たりフィルム」
姉さんはどうにか絵を見せようとしているが、部屋が暗くてよく見えない。
「これは駄目だよ。こんなの写真に写らないし」
「そうか?じゃあ次、プロ野球選手のサインボール」
姉さんは少し汚れて茶色くなったボールを投げてよこす。
「これ誰のサイン?」
「ええっとたしか、なごしまの息子だったかな」

「その人のボールはあんまり価値ないんじゃないかな・・・、ていうか流石に無理あるでしょ。お宝っていったらもっと古くてさ・・・」

その言葉を聞いて、姉さんは箱の中をまた探り始める。

「んー、あった。すげー古いエロ本」

「姉さんまじめにやって」

「んじゃこれだな」

最後に出てきたのは、星のマークが3つ入っているオレンジ色のボールだった。

「これは全部集めると竜が一つ願いを聞いてくれるっていうあれじゃないの？」

猿のような野菜っぽい人が血眼でこのボールを探し回るアニメが昔流行ったのだ。

たぶんそのアニメのおもちゃだろう。

演者の中にも猿っぽい人はいるけど、あれは女の姉さんに一発でのされるほど弱かった。

「まあそうだけど。なんか宝っぽいだろ、光ってるし玉だし」

「んー、そうだね。もうこれでいいんじゃない？」

「できたっす」

調度いいタイミングでふすまを開けた岩雄くんが今度は武士の格好で出てきた。

「これは？」

「こいつ一人二役。求婚する若い武士もやってもらうと思ってる」

「いやいや、どう見たっておばあさんと同じ顔でしょ」

正確には同じ猿だろ。

「うるせえいいんだよ、誰も気がつかないって」

「おーい、かぐやーいいかー？」

先ほどよりももっとあでやかな着物に着替えたかぐや。

「よし、撮るぞ。大和、猿にあれ渡しとけよ」

「はい、岩雄くんこれ」

「なんすか、これ。あっ、覚えてますよ。懐かしいなー」
「やっぱり岩雄くんも見てた？」
「はい、僕昔から背が高かったんで、ごっこ遊びはいつも大猿の役ばっかりやらされてましたよ」
ああーそれは身長とは関係ないんじゃないかな。
「大和と猿、何してんだ撮るぞー。かぐや、もっと悲しそうな顔しろー、おら猿。ボール置いて、頭下げろや大和秒読みー」
なんだかリズムで僕の名前が呼ばれている気がした。
「はいはい、３．２．１」

2、四話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

2、四話目

「よーし、昼間の撮影は終わりー。次の撮影は暗くなってからー」
姉さんはカメラを手に今まで撮った写真の画像を見返しながら叫んだ。
「大和、腹減った。コンビニで飯買ってこい」
「ん、分かった」

「それで、何でお前までついてくるんだよ」
信号待ち、僕はバックミラーを見ながらかぐやに言葉をぶつけた。
「え、あのあの。だって・・・お姉ちゃんが・・・」
かぐやは困った表情を浮かべた。
姉さんがいらない気を回してかぐやをよこしたらしい。
いつもは馬鹿なくせにいらないところだけ気を回すんだから。
別にかぐやと仲が悪かろうが撮影に支障はないだろ。
かぐやだって断ればいいものを、ちゃんと言いつけを守って車に乗り込んできやがった。
それで車で二人、遅い昼飯をコンビニに買いにいくなんてよく分からない空間を作り上げてしまった。
「・・・」
信号が青になったので車を発進させる。
少し走らせると来る途中で見かけたコンビニに到着、停車させる。
店内へ入り、携帯電話にとったメモを頼りに商品を探した。
えっと、姉さんはカレーライスか。
まあ、無難と言えば無難か。
コンビニの商品でもカレーがおいしくなかったなんてことないしな。
岩雄くんは・・・バナナ。
単純に好物なのだろうか、それとも野生的なレベルで何かを感じるのだろうか、今度聞いてみよう。

コンビニにバナナは置いていなかったので、まるごと一本のバナナが入ったパンを買うことにした。
その後、僕は自分用のおむすびを数個かごに入れ、お菓子売り場を覗く。
適当にスナック菓子を手に取るとかごいっぱいになるまでつめこんだ。
そこにサンドイッチと大きなペットボトルのお茶と紙コップを抱えたかぐやがやってくる。
「たくさんお菓子食べるんですね」
かぐやは僕の顔色を伺いながら微笑む。
「全部姉さんのだよ、お菓子ないと怒るから。あー、かごに入らないから悪いけどそれ、自分で持ってレジまで持ってきて」
「あ、はい」
かぐやは商品を細い腕で抱えながら、僕の半歩後ろをついてくる。
「すいませーん」
レジに誰も立っていなかった。
しょうがなく、店の奥に声をかける。
「はいはい、なんだ坊主」
奥からおじいさんがゆっくりと出てきた。
「うちのコンビニは深夜営業してないからバイトなんて雇わんぞ」
おじいさんは僕をバイトを探しにきた学生か何かと勘違いしたのか、顔を見るなり言い放った。
田舎のコンビニは二十四時間営業じゃないのか、と驚きながらも反論する。
「お客ですよ」
僕はお菓子のいっぱい詰まったかごをレジにのせた。
「なんだ、客か。早く言えよ」
客だと分かっても態度を変えることなく、おじいさんは商品を袋につめながらレジうちを始める。
「えーっと、２００万５２円」

「「ええっ！？」」
かぐやと全く同じタイミングで声をあげてしまった。
「絶対計算間違ってますよ。そんな買い物してませんって！」
「んーじゃあ、２０００円でいいや。」
「いいんですか、そんなので。２０００円は流石に超えてると思うけど」
おじいさんは「いいっていいって」と忠告を無視する。
僕は財布からお金を取り出し、置いた。
なんでつぶれてないんだこのコンビニ。
おじいさんはその２０００円を何故かポケットにいれて話しかける。
「坊主たち、アベックか？」
「ええっ！？」
今度はかぐやだけが過剰に反応した。
「そ、そんな、えっと。あの」
顔を真っ赤にしながら体をもじもじと揺らす。
「違いますよ。それにアベックって言い方はもう古いですよ」
僕はきっぱりと否定した。
「なんだ、違うんか」
おじいさんは興味を失い、すぐ帰れと言わんばかりにスプーンを適当に袋に突っ込んだ。
そして客がまだいるにも関わらず、さっさと店の奥に消えていった。
「行くぞ」
僕はまだわたわたとしているかぐやを連れて、奇妙なコンビニを出た。

「んー、うまい」
姉さんは自分のカレーライスと僕のおむすび二個をたいらげた。
そして今は腹ごなしに山とつまれたお菓子を食べている。
「あれ、かぐやさんは何処に行かれたんすか？」
器用にバナナだけを食べた後、パンの部分は姉さんが食べたのであ

れは間接キスだと言い張っていた岩雄くんがキョロキョロと周りを見回している。
そういえばさっきから姿が見えないな。
「ああ、かぐやはさっさと飯食って着替えに行ったぞ。あいつの衣装は時間かかるからな」
姉さんは新しいスナックの袋に手をかけながら言った。
「いいっすよね、着物姿って」
岩雄くんが天を仰ぎながら目を輝かせた。
たぶん頭の中はよからぬ事を考えているのだろう。
「何で？」
「だって、着るの大変そうだけど、脱がせるの簡単そうじゃないですか！」
知り合ってから今までで一番いい笑顔を見た気がする。
「梅さんは着物、着ないんですか？」
岩雄くんは躊躇なく人の姉を毒牙にかけた。
よくあの発言の後に、そんな質問できるなと関心しながらも姉さんを見る。
「なんだ猿、私の着物姿が見たいのか？」
姉さんはノリノリでからかい始める。
「はい！見たいっす！」
「じゃあ、今日のギャラなしでいいか？」
「はい！いいっす！」
簡単に姉さんの口車に乗り、ただ働きの確約をする岩雄くん。
それじゃあまりにかわいそうなので助け舟を出す。
「騙されてるよ、岩雄くん」
「いや、自分見られるなら給料がなくったって・・・」
そこまでか、猿。
「姉さんは帯でミイラ男みたいになるのが関の山だよ」
「あんだとお？」
姉さんが立ち上がろうとしたところで、タイミングよくかぐやが入

ってきた。
僕はかぐやの姿を見ながら、思わずつばを飲み込んだ。
前の二着の着物とはあきらかに違い、金色の多く使われた豪華な衣装。
きらびやかで、圧倒されるような美しさでありながらいつまでも見ていたいような気持ちにさせる。
僕はかぐやから目が離せなくなってしまっていた。
その様子を見た姉さんが、ニヤつきながら話しかける。
「おい、大和。かぐやはどうだ?」
「なんていうか・・・綺麗だ。髪も長くて、染めてないから真っ黒だし。本当にお姫様みたいな・・・」
ぼーっとしていた僕は思わず本音を言ってしまった。
「おー、そうかそうか。綺麗か。」
姉さんのその言葉で現実に戻ってきた僕は慌てて、
「あれ、僕なんて言ってた!?」
と姉さんに詰め寄った。
その横でかぐやが顔を真っ赤にしながらがたがたと震えている。
目にはどんどんと涙が溜まってきて、今にもこぼれそうだ。
「大和、車の鍵は?」
姉さんが僕の肩を叩いた。
「え、ここにあるけど」
ポケットから鍵を取り出し、姉さんに見せる。
姉さんはそれを奪い取り、家の外に向かって思いっきり投げ飛ばした。
「何すんのさ!?」
僕は慌てて鍵を拾いに走る。

◇

「よし、もう行ったぞかぐや」
「うっ・・・・」

「大丈夫か？」
「お姉ちゃん、聞いた！？大和くんが綺麗だって！！！」
「あ、ああ。聞いたよ、聞いた」
「あれ、私その時どんな顔してた？あれあれ！？」
「落ち着けよ、かぐや。ほら、お茶飲め」
「うん、ありがとお姉ちゃん」
「ふぅ・・・」
「落ち着いたか？」
「うん」
「それにしても本当に給料なくていいのか？」
「いいよ、だってまた大和くんと会えたし」
「そうか。それくらいならお安い御用なんだがな」
「それにお姉ちゃんが大和くんとの仲を取り持ってくれるんでしょ？」
「それなんだがなあ・・・実はお前のライバルに止められてんだよな」
「ええ！誰それ！？大和くん彼女いたの？」
「いや、いない」
「じゃあ何なのその子！？」
「何っていうか、まあ一緒に住んでるんだけど」
「付き合ってないのにすでに同棲してるの！？いやあああああ」
「落ち着け、かぐや。いるだろ一人」
「え、・・・もしかしてひなたちゃん？」
「そうだよ」
「あー、そっか」
「だからあんまりヒイキはできないんだよ、悪いな」
「ううん、いいよ。お姉ちゃん」
「誰ですか？ひなたちゃんって」
「なんだよ猿、いきなり入ってきて。誰って私の娘だが？」
「娘！？いやあああああああああああ」

◇

「姉さん何すんのさ！」

汗だくで戻ってきた僕は姉さんを怒鳴った。

「もう少しで側溝に落ちるところだったんだよ。これが無くなったら家に帰れないじゃないか」

「あーもう、うるせえうるせえ。悪かった悪かった」

「大体姉さんは、・・・どうしたの岩雄くん。動かないけど」

「知らない」

「姉さん、何かしたの？」

僕は疑いの目を向けた。

「何もしてないよ。信じてないな？分かったよ、直せばいいんだろ？」

姉さんは腰をかがめて、利き腕の右手の袖をまくると大きく広げた。

「はっ。梅さんの思いがけない告白で、一瞬気を失っていたっ」

「ラリアート！」

その日、宙で二回転して地面に倒れた岩雄くんの意識が戻ってくる事はなかった。

2、五話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

2、五話目

栄枯盛衰。
昼の間、空の上で幅を利かせていた太陽はゆっくりと沈んでいく。
次第に辺りは暗くなっていき、丘の下の家々に明かりが灯った。
一面を黒のペンキで塗りつぶされた空は、静かに漂う月を迎え入れる。
「月が綺麗だなあ、大和」
姉さんは僕を庭に連れ出した。
「そうだね、今日はちょうど満月なのかな」
僕は口をぽかんと開けて、真ん丸の月に見入ってしまった。
空気が澄んでいるせいか、ここは月だけでなく星もよく見える。
「これが正真正銘の満月だぞ。何ていったって事前に調べて、撮影を今日にしたんだからな。感謝しろよ？こうやって満月の元で撮影できるのは私のおかげなんだから」
姉さんは僕の頭をぐしゃぐしゃに撫でまわしながら自慢げに言った。
なるほど、何で急に撮影したいなんて言い出したかと思ったら、そういうことか。
恐らく姉さんはテレビやネットか何かで満月の日付の情報を仕入れたんだろう。
今回、なぜ姉さんの急な思いつきが流れなかったのか。
それはきっと満月の日付が決まっていたからだ。
姉さんは日々の勉強はほとんどしなかったが、夏休みの宿題なんかは新学期までにちゃんとやっていく人だった。
あとは宿題の半分を弟に押し付けていなければ、頭もだいぶ良くなったことだろう。
何にせよ、姉さんは目先のしっかりとした目標と期日があれば行動する人なのだ。
「大和、月ではウサギが餅をついてるんだぞ」

僕はビクンと体を震わせた。
姉さんが急にメルヘンチックなことを言い出したので、体が拒否反応を起こしたからではない。
僕はウサギという単語に反応してしまったのだ。
先ほど、鮮明に眼球に焼き付けた記憶。
ついかぐやの下着の上でウサギが餅をつく様子を想像してしまう。
いかんいかん。
意識をしっかり持って妄想を消し、邪念を吹き飛ばす。
「餅食いたいなあ・・・」
やはり食べ物の方に流れた姉さんを見て、慌てた自分が馬鹿らしくなってくる。
「そろそろ撮影しようよ」
「ん、そうだな。よしかぐや呼んでこい」
姉さんは名残惜しそうに空を見上げながら、ゆっくりとカメラを取りに部屋へ戻っていった。

「よーし、撮るぞー」
姉さんがさっき作ったばかりの急ごしらえのメガホンを口に当てて叫ぶ。
縁側で月を眺める、かぐやと僕。
たぶんこの本で一番重要なシーンだ。
「かぐやー、表情かたーい」
姉さんはカメラを覗きながらかぐやに注意する。
先ほどから隣で見ていても思う、かぐやの表情は固い。
というか、挙動不審というか小刻みに震えているのが気になってしょうがない。
「姫が貧乏ゆすりとかやめろよな。写真には写らないけど、イメージが崩れる」
「あっ、ごっ、ごめんね。今やめるからっ」
かぐやが顔を真っ赤にしながら謝る。

それでも正座したかぐやの足は止まらなかった。
「何、トイレ？」
「ちちちち、違うよ。あのあのあの」
わたわたと手の前で両手を左右に振るかぐや。
「かぐや、ちょっと来い」
姉さんが少し怒鳴ったような声でかぐやを呼びつけた。
「な、何？お姉ちゃん。はうっ」
かぐやは慌てて歩き出そうとして、自分の着物のすそを踏み勢いよく前にころんだ。
どんくさいやつ。
打ちつけた場所をさすりながら、ゆっくりとカメラの方へ近づいていく。
姉さんと二言三言喋った後、かぐやが戻ってきた。
やけに落ち着いた表情をしている。
体の振動も止まったようだ。
「よーし、撮るぞー。表情作れかぐやー」
パシャリ
フラッシュが光る。
そういえば今回は僕に秒読みをやらせなかったな。
「よし、オッケー。いい顔だったぞかぐや」
満足した笑みを浮かべる姉さん。
僕は立ち位置の関係で見えなかったかぐやの表情が、どうにも気になってしょうがなかった。

「姉さん、質問」
僕は台本を眺めながら、台本の作成者である姉さんに指摘した。
「ん、何だ？私のスリーサイズなら教えないぞ」
「そんなこと聞かないよ、あの猿じゃないんだから」
「確かにな、大和はあの猿じゃないしな」
言いたい放題言われている岩雄くんは、姉さんの黄金の右腕のせい

でまだ気絶している。
「次のシーンだけど、沢山の武士が出てくるじゃない？」
「ん、ああ。そうだな」
姉さんも自分用の台本をパラパラとめくりながら答える。
「どうすんの？武士候補の一人はあそこでのびてるけど」
主に姉さんのせいで。
それでも倒れている岩雄くんの顔がどこか安らかに見えるのは気のせいだろうか。
「ああ、それな。大丈夫だ、少し待ってろ」
姉さんは僕のポケットから携帯電話を抜き取り、どこかに電話をはじめた。
「ん、すぐ来い。場所は分かるだろ。ん、え！？あー、まあいいや。来い」
姉さんは少ない言葉を交わし、電話を切った。
「もうすぐ来るぞ」
何やら雲行きのおかしくなるような声が聞こえたが・・・。
姉さんは携帯ストラップを指に通し、電話ごとぐるぐる回す。
キキーッ
言って十秒もしないうちに、門の前に車が止まった。
見た事のある黒塗りの車。
これもまた見た事のある大男たちが降りてくる。
「おお、こっちだ」
姉さんは手をあげて男たちを呼び寄せた。
姉さんの姿を見つけた男たちは庭に一列に並び、
「姉御、今日もよろしくお願いします！」
と大声を張り上げた。
「おう、よろしくな」
姉さんも片手を振り上げ、その挨拶に応じた。
列の中心にいた男が近づいてくる。
「これは、監督さんじゃないですか。お久しぶりです」

「ああ、悪役事務所の方ですよね。この前はどうも・・・」
腰を低くして、頭を下げる。
男はサングラスをはずし、優しい笑顔を見せた。
どうやらまだ愉快な勘違いは続いているらしい。
そういえば姉さんの呼び方も変わってるな。
「それで、今日は・・・」
「ええ、姉御から召集がかかりましてね。今日は頑張りますよー！」
男は元気いっぱいに意気込みを表明した。
「そうですか、・・・ではこちらで衣装に着替えてください」
男たちは几帳面に靴を揃え、縁側から部屋の中へと入っていった。

「着替えましたかー？」
ふすまを開けて、衣装を確認しに来た僕を男たちが向かえる。
「どうでしょうか」
男たち、いや今は立派な武士たちは一列に並んで立っていた。
サングラスとスーツを脱いだ男たちは見違えるほどに爽やかだった。
「どうだー？」
そこに姉さんが何か断りをいれるでもなく入ってくる。
「おお、お前たち男前になったじゃないか」
姉さんは一人の肩を叩きながら言った。
「「「「「ありがとうございます、姉御」」」」」
いちいち暑苦しい武士たちだ。
「姉さん、武士が持つ弓や刀はどこ？」
「刀はあっちにあるぞ」
「弓は？」
「・・・」
姉さんの動きが急に止まった。
黙ったまま、壁の一点を見つめている。
「監督さん、心配しないで下さい。ちゃんと持ってきてます」
男たちが一斉に着ていた衣装から何かを取り出した。

黒い物体。たぶん普通に生きていれば見る事は一生ないであろう代物。
それは紛れもなく銃だった。
「ひっ」
僕は後ずさりして、生唾を飲み込んだ。
「すいません、姉御。一般人の我々では本物が手に入りませんでした」
男たちは土下座して謝る。
「あ、え？それ偽物？」
「はい、モデルガンです」
男は持っていた銃を僕に渡した。
なるほど、確かに素材はちゃっちく、小さな丸い玉を入れるようになっている。
「でも何でこんな物を？」
「ええ、姉御から撃てる物を持参しろとのことでしたので」
誰かさんの孫じゃなくても、体の縮んだ高校生探偵じゃなくても、簡単に謎のすべて解けた僕は姉さんに射るような眼差しを向けた。
姉さんはいまだに壁の一点を見続けていた。
「どうすんのさ、姉さん」
ここまで姉さんが立てたスケジュールと準備は僕の思っていた及第点を遥かに上回っていた。
しかしここでとうとうやらかしてしまった。
だっておかしいもの。
このお話の時代に銃なんてない。
それに男たちの衣装とどうしたって銃は合わない。
お話にならないくらいの問題が今になって露呈した撮影を、姉さんはどうやって舵取りするのかと思えば、
「うるせー、なんとかなるだろ。行くぞ！」
それだけの言葉で姉さんはきびすをかえし、男たちを引き連れて庭に出て行った。

「よーし、謎の発光体が上空にあるていで行くぞ。お前たちは上に向かって銃を撃ってる武士だ、分かったか？」
「はい！」
はい、じゃないだろ。
何事もなかったかのように姉さんは撮影をはじめた。
かぐやは当然、何がどうなってるのか分からないといった表情を浮かべている。
「その後に、大勢の武士が寝てしまったシーンも連続で撮るからな。おい、聞いてんのか大和」
「あ～、聞いてるよ～」
返事もどこか力の抜けた返事になる。
「よーし、撮るぞ。大和秒読みー」
「3．2．1」
空にシャッター音が響き渡る。
「次、倒れろー。・・・よし、大和秒読みー」
「3．2．1」
撮り終えた後も、地面に倒れている武士たち。
その手にはしっかりと拳銃が握られていた。

2、六話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

2、六話目

「じゃあ私は準備があるから」
そう言って、僕が詰め寄る前に姉さんはさっさと奥の部屋へと消えていった。
僕は倒れている武士姿の男たちに声をかけ、土を払ってから部屋の中で待機してもらうことにする。
「はぁ・・・」
照明機材を持ちあげる手がかじかむ。
ここにきて、だいぶ疲れを感じてきた。
僕は自分の手に息を吐きかけながら、姉さんに叩き起こされて始まった今日を振り返った。
と、言っても考える事は一つ。
かぐやとの再会だ。
一日一緒に過ごして感じたのは、かぐやはかぐやのままだったってことだ。
無口でいつもおどおどしているあの頃のかぐやと同じ。
それはつまり僕が嫌っているかぐやのままだったということ。
しかし何故だろう。
あの頃のようにこみ上げてくるような怒りはない。
多少食わず嫌いのような嫌悪感はあるものの、田んぼに落としてやりたいとか、財布の中のお札を全部硬貨にしてやりたいとか、鞄の中に魚の刺身をいれてやりたいとか、そういったことは思わなくなった。
これは単に僕が大人になったからなのか、それとも他に理由があるのか。
いくら考えても答えは出なかったので、僕は池の周りの石に腰掛けながら鯉をぼーっと眺めることにした。
ざっざっざっ

誰かが近づいてくる。
恐らく準備を終えた姉さんだろう。
やっぱり今回も姉さんは出演するのか、と思いつつ顔を上げた。
しかし、そこに立っていたのは姉さんではなく、かぐやだった。
かぐやのきらびやかな衣装が月明かりを反射してキラキラと輝く。
しかしそれ以上に美しく、存在感を発揮していたのはかぐや自身だった。
綺麗というよりは、艶めかしい。
思いつめたような顔をして、僕の数歩前の地面を見つめている。
文句の一つでも言うのかと思えば、何も言わず黙ったまま立ち尽くしている。
二人とも無言のまま一分ほどが経ち、たまらず僕の方から口を開いた。
「なんだよ」
「・・・」
返事は返ってこない。
僕はそれを確認し、石の上から腰をあげその場を立ち去ろうとする。
「あの！」
いきなりかぐやが大声を出したので、びっくりしてその場で固まってしまった。
なんだ、と思いつつも口から言葉が出て行かない。
「あの！私、緊張ししちゃて、ちゃんとしゃぶぇれなくなっちゃうから・・・その・・・・」
かぐやの体が小刻みに震える。
手を固く握り締め、ありったけの声を絞り出しているようだ。
「私は大和くんと仲良しになりたいでぶ！！！」
かぐやの叫び声が辺りに響き渡った。
かぐやは吐ききった息を取り戻すため、大きく息を吸う。
呼吸を整えると同時に、それは嗚咽に変わった。
そしてかぐやの目からは涙が零れ落ちる。

ぽろぽろと地面に落ちて、それは染みに変わった。
「お、おい。泣くなよ、僕が泣かせたみたいだろ」
僕は慌ててかぐやの側へと駆け寄った。
「みたいじゃねえよ、馬鹿」
いつの間にか姉さんがかぐやと僕の隣にいた。
「うっ・・・おねべちゃあああん」
「ああ、分かった分かった。大和、ちょっとあっち行ってろ。うわ、鼻水つけんな汚い！」
僕は姉さんに言われたとおり、奥の部屋へとあがった。
だいぶして姉さんだけが部屋に戻ってきた。
「もう大丈夫だ。でもかぐやが顔合わせられないって」
「ああ、うん。まあそれはいいんだけど」
僕は何とも言えない気持ちになった。
「お前まで泣きそうな顔すんなよ、ほら次撮ってさっさと終わらせるぞ」
姉さんは僕の頭を優しく撫でながら言った。
「うん。ていうか、姉さんその格好何なの？」
「やっぱり着れなかった。大和直してー」
姉さんは着物の上から、体に帯をぐるぐる巻きに巻きつけた格好だった。
首には羽衣をつけている。
ミイラ男じゃなくて、ロープで捕まったまま首吊りをする人が正解だったか。
僕と姉さんは部屋に入り、帯をほどいてまき直した。
「あっ」
岩雄くん、寝ている場合じゃないぞ！
君が給料を捨ててまで見たがっていた光景がまさに今ここにあるんだ。
起きろ、岩雄。起きろ、猿！
・・・駄目だ、返事がない。やっぱり死体のようだ。

「じゃあ、撮ってくるからお前はここで待ってろ」
姉さんは僕を置いて部屋を出た。
それはきっと僕とかぐやに対しての気遣いだろう。
その後の写真には、月からの使い（姉さん）に手を引かれる、泣きすぎでウサギのように目を真っ赤にした女の子が写っていた。
そして姉さんは、お話にこういう一文を付け加えた。

『おじいさんとおばあさんとのわかれをかなしんだひめは、なきながらつきへとのぼっていきました。』

◇

「あっはっはっ、しかし傑作だったな」
「笑いすぎだよ、姉さん」
撮影を終え、ようやく昨日めでたく発売にこぎつけた。
今回はおかしな部分があるにはあったが少なかったこと、そして何よりかぐやのビジュアルのお陰で、店頭に置いてくれる本屋さんが増えた。
と言っても、前よりは増えたというだけでそれでも数は少ない。
今回の売り上げもきっと水平線を辿ることになるだろう。
「また、一緒にかぐやと撮影できたら、嬉しいかな、って思っただけ。って何だそれ、あっはっはっは」
「まだ言ってたの姉さん。もういい加減飽きてよ」
「いや、もう最高だったよ。録画しとけばよかった。そしたらかぐやと二人でまた見れたのにな」
姉さんは腹を抱えて笑ったまま、ソファーに倒れこんだ。
「あー、ふぅ。全く、かぐやも大和も口下手で困るなあ」
「うるさいよ、姉さんこそ言葉より手が先に出るタイプのくせに」
「ああ？」
「何でもありません。・・・それにしても岩雄くん置いてきてよかったのかな」

「大丈夫だろ、書置きしたし。あいつ旅慣れしてるしな」
書置きって、先に帰るぞの五文字しか書いてなかったあれのことか？
適当だなあ、ほんとに・・・。
「さーて次はどんなの撮ろうかなー」
「当分はやめてよね。お金無くなっちゃうよ」
「これで明後日くらいに叩き起こしたらびっくりするかな」
「・・・」
「あ、そうだ大和。お前に言わなきゃいけないことがあったんだ」

・
・
・

この三日後、とある掲示板でこんな名前のスレッドが建った。
『すげー可愛い子の載ってる絵本買ってきた！』

2、六話目（後書き）

2話目終了、3話目に続く

3、一話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

3、一話目

「よし、今日からお前はひなただ」
「・・・」
「私は梅。で、こっちが大和。お前の・・・あー、おじさん？」
「ちょっと姉さん、おじさんはやめてよ。せめて兄さんで勘弁してくれないかな」
「お兄・・・ちゃん？」
「そうだ、こいつはお前のお兄ちゃんだ。だからいつでもこき使っていいぞ」
「はいはい、ちょっと姉さんは黙ってて。ひなたちゃん、ひなたちゃんは絶対に姉さんみたいになっちゃ駄目だよ」
「あんだとー！？」
「・・・」

◇

「姉さん、起きてよ」
部屋のドアをノックしながら何度も呼びかける。
「・・・」
しかし部屋からの応答はない。
「入るよー、姉さん」
僕は一声かけた後、勢いよくドアを開けた。
「・・・いつ見ても汚い・・・」
姉さんの部屋は足の踏み場もないほど物が散乱している。
僕はそれらを足でどかしながら、少しずつ姉さんの寝ているベッドに近づいていった。
漫画、ＣＤ、・・・これは卒業制作？
一体いつのものだろう。

姉さんのベッドを中心に物が層を作りながら広がっている。
それはさながら、水面に水を一滴垂らした時にできる波の広がる様子に似ていた。
僕はその中から、厚めの漫画雑誌を拾い上げ、自分の頭の上にかまえた。
何層も何層も詰みあがった物の地層をどけ、姉さんの側にやっとこさたどり着き声をかける。
「姉さん、いいかげん起きてよ」
「んあ、・・・んん」
案の定、簡単には起きてくれない。
「姉さん、姉さんってば」
「んあ、・・・あちょー！」
寝ぼけた姉さんは僕の頭にものすごい速さでチョップを繰り出した。
僕はその攻撃を間一髪のところで雑誌でガードする。
「んお、なんだ!?なんだ、大和か」
枕元に無数に転がっている砕けた目覚まし時計のようにされなくてよかった。
「朝だよ、目が覚めた？」
「んー、あと５０分」
せっかく体を起こしたのに、また座ったまま横に傾きベッドに倒れこんだ。
「姉さんは５０分どころじゃ起きないだろ」
「じゃあ５０話」
「そこまで続いてる自信ないよ・・・」
姉さんは枕に顔をうずめ、本格的に二度寝の体勢に入った。
「ちょっと、寝ちゃ駄目だってば」
「んー・・・梅ちゃんクイーズ！」
おっ、久しぶりだな。
「サイはサイでも角の生えていないサイってなーんだ」
「白菜」

「ぶっぶー」
「チンゲンサイ」
「はずれー。野菜じゃなーい」
「天才」
「ちっがーう」
「今日はひなたと出かけるんでしょ、起きなさい」
僕は姉さんが顔をうずめていた枕を横から抜き取った。
姉さんはむくりと倒れていた体起こし、
「正解。ひなた、おはよう」
と、いつの間にかドアの前に立っていたひなたに笑って挨拶をした。

「姉さん、ちゃんと見てる?」
「見てるよ、うるせーなあ」
姉さんの寝坊のせいで完全に出遅れた。
休日と言う事もあり、朝早くから遊園地の駐車場は車で埋め尽くされている。
今は血眼で車の止まっていない駐車スペースを探しているところだ。
「あった」
ひなたは表情を変えず、口だけがぱくぱくと動く。
「どこだ、どこだ?」
姉さんはひなたの指差した方に視線を向ける。
「おっ、本当だ。空いてるぞ大和」
「え、どこどこ」
僕もきょろきょろと辺りを見ました。
「あっ、本当だ」
すでに通り過ぎた後ろの方に車の止まっていないところがある。
しかし見つけた時には遅かった。
後ろからやってきた車が急いでそこに車体を滑り込ませた。
「あーあー、しっかりしろよ大和ー」
後部座席から背中に軽く蹴りが入る。

「無茶言わないでよ。こんなに車いたらバックできないんだよ」
「そこを何とかするのが男だろー。なー、ひなた」
「ん」
ひなたはうんうんと頷いた。
バックミラー越しに二人の視線を感じる。
「次はあっちが空いたぞ！」
「ん」
姉さんが後部座席から身を乗り出して指をさした。
「えっ、どこどこ？」
「うっそー。ぷぷぷ、大和騙されてやんの。いえーいひなたハイタッチ」
「ハイタッチ」
もうこのコンビはほうっておこう。
入園する前からある意味でのアトラクションを体験した僕らは結局入場ゲートからかなり遠いところに車を止めた。
車を降りた僕の足元に、ひなたがちょこちょこと近づいてくる。
「ん」
ひなたは無表情のまま右手を僕に突き出した。
「そういう時は手をつないでって言わなきゃ駄目だよ。言葉にしないと何も伝わらないよ」
僕の言葉を聞いて、ひなたは突き出した手をひっこめてしまう。
「うわっ、意地悪だな大和」
後ろで茶化す姉さん。
ひなたは少し考えた後、
「つないで？」
照れながらもう一度手を伸ばした。
姉さんが満足げに微笑みながら右手を少し浮かせた。
すでに左手は姉さんの右手とつながっていた。
僕は右手でひなたの頭を撫でながら、左手でしっかりと小さな手を握った。

人、人、人。
どこを見ても人だらけ。
家族連れやカップル。学生服を着た団体もいる。
入園するだけでも一苦労だったのに、これだけ人が多いと入ってからも大変そうだ。
「風船もらいに行こうぜー」
姉さんがひなたの手を引きながら、風船を持った遊園地のマスコットめがけて突進する。
「ひゃぁっ、ぐふっ」
そのままのスピードで姉さんは着ぐるみとぶつかり、長い耳をしたウサギのマスコットがその場に膝から崩れ落ちた。
しかし倒れてもなお、手に持った風船は絶対に離さないプロ根性に感動すら覚える。
ウサギは倒れたまま時おりぴくぴくと跳ねる。
分かるぞ、ウサギよ。僕だって姉さんのタックルを生身でくらったことがある。
車に轢かれたみたいだろ？実際そうなんだよ。
猛スピードで坂を下ってきた自転車と真正面からぶつかって、相手の方を病院送りにするような人なんだよ。
たぶん姉さんは人間の皮をかぶった猛牛か何かなんだ。
そう、姉さんはバッファローウーマンだ。
僕は他人のふりをしながら、なるべく遠くでウサギを見守る。
（おっ、起き上がるか？）
ウサギは腕をがくがくと震わせながら、重たい体をゆっくりと持ち上げる。
（抗議するか？しかしその時にはお前の真っ白な毛皮は真っ赤に染まっているぞ）
ウサギはもう少しで立ち上がるというところで、あえなく倒れてしまった。

捨て身のタックルの反動で一緒に倒れていた姉さんが立ち上がる。
「ふぅ、ウサギ狩り終了。風船はすべてもらっていくぞ」
すでに山賊だな、あの人は。
無情にもウサギが死守した風船をすべて奪い取り、
「いい戦いだったぞウサギ。ほらひなた、風船だ」
と言って、そのすべてをひなたに渡した。
ひなたは眉一つぴくりとも動かさずに黙ったまま両手にたくさんの風船の紐を握っている。
「・・・浮かないな」
「浮くわけないだろ馬鹿」
思わずつっこんでしまった。
立ち止まって動向をうかがっていたギャラリーの視線が一斉に僕に向いた。
「何だとー!?ひなた軽いから浮くかもしれないだろ」
「風船おじさんなんてもう流行らないよ馬鹿。ほら、もう行こ。係の人来ちゃうよ」
「ちっ、人のことを馬鹿馬鹿と。覚えてろよ大和・・・」
僕はひなたと姉さんの手をとり、逃げるようにその場から立ち去った。

3、二話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

3、二話目

「おー飛んでったなー」
色とりどりの風船が青い空に吸い込まれていく。
風船はひなたの手を離れ、上へ上へと舞い上がっていった。
姉さんはその様子を見ながら、買ってきたポップコーンを口に投げ入れる。
「ちょっと・・・休ませて」
僕はベンチに座って息を整えながら汗をぬぐった。
「なんだよ、もう疲れたのか？今来たばっかりじゃないか。これやるから元気出せ」
姉さんは強引に僕の渇ききった口にポップコーンをねじこむ。
僕は抵抗することなく、ろくに噛まずに飲み込んだ。
余計にのど渇くわ。
「僕が途中からひなたを背負って走ってたの見たでしょ？」
「ん」
僕の隣に座っていたひなたが立ち上がり、頭をなでてくれた。
「まさか私の攻撃を受けて今日中に起き上がる野うさぎがいたとはね。確実にしとめたと思ったんだがな」
指をポキポキと鳴らしながら、なぜか嬉しそうに笑う姉さん。
まさかあの後、ウサギが起き上って追跡までしてきたなんて僕だって驚いた。
「逃げればいいのに、迎撃してとどめをさそうとするから余計に僕が疲れたんでしょ」
「私が本気で振りぬけば今度こそ確実に落とせる自信はあったぞ」
「捕まるよ、姉さん」
「何を言う。マスコットは殴られてなんぼだろ、はっはっはっ」
全治二週間。当時中学生だった姉さんが、学校の避難訓練に駆けつけた消防署のマスコットキャラクター、消火貴君に負わせた怪我だ。

「さてと、何に乗ろうかなー。ふっふふーん」
鼻歌を口ずさみながら、パンフレットを広げる。
「ひなたも乗れるやつにしてよ、姉さん」
「オッケーオッケー。じゃあこれだな」
姉さんは目当てのアトラクションに向けてまっすぐ歩き出した。

「これならひなただって乗れるだろ」
「ん」
姉さんの案内でたどり着いたアトラクションは言わずと知れたティーカップ。
これなら身長制限もないしひなたの様な小さな子供でも大丈夫だ。
列もそんなに長くないし、順番はすぐに回ってくるだろう。
「姉さんにしては普通だなあ。てっきり姉さんの事だからマスコットショーを見に行って一匹ずつ血祭りにあげていくのかと思ったけど」
「それもいいが、」
それもいいんだ。
「こっちの方が面白いだろ」
姉さんはにかっと笑みを浮かべた。
「パパー、愛もう立ってるの疲れたー」
「なんだ、愛はしょうがないなあ」
少し前に並んでいたひなたと同じ年齢くらいの少女が父親に抱き上げられた。
「あっ、あれにも乗りたーい」
「ちょっと待ちなさい、健也」
違うアトラクションに向けて走り出す少年を慌てて止める母親。
あれくらいの頃はじっとしていることができないからなあ。
僕もそうだったなあ、と過去を懐かしんでみる。
しかし現在進行形でその年齢のひなたは文句一つ言わず僕らの隣に並んでいる。

僕はひなたのつやつやな黒髪をなでた。
「何？」
「なんでもないよ」
不思議そうな顔で僕の顔を覗き込む。
「ひなた、大和の足に抱きつけ」
「ん」
姉さんの指令に忠実に遂行するひなた。
片足だけずっしりと重くなった。
「前に進んだぞ、大和。ほらきびきび歩け」
「ぐっ・・・分かったよ姉さん」
僕は足にひなたを巻きつかせたままゆっくり歩を進めた。

「だいぶ進んだな、私たちは次くらいか？」
「そうだね」
一度に乗れる人数も多く、一回の稼働時間もそう長くない。
前にならんでいた列の人間はあっという間に減っていった。
「では次の方、搭乗をはじめてください。後ろの方は前にお進みください」
係員が後ろの方にも聞こえるように大きな声を出した。
「行くぞ、ひなた大和」
僕はまだ誰も乗っていないカップを見つけて乗り込んだ。
「さっさと奥につめろよ」
姉さんが僕の背中を押しながら乗り込んでくる。
「んじゃ、危ないからひなたはこっちな」
「えっ」
姉さんは開いていた隣のカップに乗るようひなたに言い、ひなたもそれに従う。
「どうした？」
「えっ、ちょっと待って姉さん。何でひなたを一人で隣のカップに乗せたの？」

言い終わるのが先か後か、開始のブザー音がけたたましく鳴り、カップが回転を始める。
姉さんは僕の顔を見つめたままにたりと笑い、
「おらおらおらおらあああああ」
カップの中央にあるハンドルを回してぐんぐんとカップの回転する速度をあげた。
「止めて止めて止めて止めてー！」
「うるさーい」
周りの風景が自分を中心にぐるんぐるんと回り続ける。
カップの速度はなおも上がり続け、これ以上速くならないところまできたようだ。
うっ・・・口からもう色々と出そう・・・。
「不満と説教以外なら出していいぞ。わはは」
超スピードのカップを楽々乗りこなしている姉さん。
その時、一瞬だが視界の中にひなたを見つけた。
まるで一つも波がおきない湖の水面のような表情で、そこに座っている。
・・・。
周りではたくさんの親子連れが笑顔を咲かせていた。
僕はなんだか悲しい気持ちになった。
「ちっ、このスピードに慣れてきたか。そうだ大和、さっきはよくも人のことを馬鹿呼ばわりしてくれたな。そんなお前に人は風船がなくても飛べるってところを見せてやる」
「え？」
姉さんはそう言って、僕の胸倉を掴んだまま立ち上がった。
その場で浮き上がった僕を襲ったのは、すごいパワーの遠心力。
僕の手足はカップの外に投げ出されたまま、宙吊り状態になる。
「姉さん、死ぬ死ぬ死ぬー！」
「はっはっはっ、お前今飛んでるぞ。どうだ、空を飛ぶ気分は？」
「振舞わされてるだけだー！今すぐ降ろせー！！！」

「きゃー！」
乗っていた親子連れか、はたまた列で並んでいた人か。
どこからか聞こえた叫び声で、ティーカップは緊急停止された。

「怒られちゃった」
姉さんはしゅんとしながら、ひなたに報告した。
「あんなに怒られたのは初めてだよ。怖かったよな、鳥人間」
「姉さんは怒られてもすぐに忘れてるだけだろ、この鳥頭人間」
僕はベンチに横になったまま姉さんを怒鳴りつけた。
あの後、姉さんと足元のふらつく僕は揃って他の建物に連れて行かれ、係の人にこっぴどく説教をされた。
つまみ出されていないのが不思議なくらいだ。
しかし僕は怒られている最中もずっとひなたのあの顔が気になっていた。
楽しそうでもない、寂しそうでもない。
無表情で無感情。
「姉さん次からは」
「分かってるって。復讐も終わったし、次のアトラクションは三人で乗ろうな、ひなた」
「ん」
ひなたは小さくうなずいた。

「次はどこにすっかなー」
ベンチから動けない僕を尻目に、姉さんが次に乗るアトラクションを探している。
「大丈夫？」
ひなたは僕の頭の隣にちょこんと座り、頭をなでた。
「こんちぁっす」
何処からか声が聞こえた。
しかし目の前には誰もいない。

「大和さん、下っすよ下」
目を少しだけ下に傾けてみると、ベンチよりも下で四つんばいで伏せている猿がいた。
「大和、ひなたの耳抑えろ」
「うん。ひなた、僕がいいって言うまで目を閉じてて。」
「ん」
ひなたは固く目を閉じ、僕は起き上がってひなたの耳に両手を添えた。
「梅さんもこんちぁっす」
「教育的指導！」
「ぶふぁ！？」
茶色の全身タイツを着た懐かしいスタイルの岩雄くんが姉さんの拳によって吹き飛ばされる。
「何やってるの、岩雄くん」
特に心配もせず、岩雄くんに話しかけた。
「いてて、いや、バイトをですね」
「教育的指導！」
「うぉ！？」
すんでのところで岩雄くんは姉さんの左フックを避ける。
「ぬっ！？」
「姉さんストップ。追撃したら流石に指導じゃなくて体罰になっちゃうよ。それに話が進まないから少しじっとしてて」
「あっ、あり（がとうご）ざいます、大和さん」
岩雄くんがへろへろと崩れ落ちながらお礼を言う。
「へえ、バイト中なんだ。休日なのに大変だね」
「いえ、こんなの何てことないですよ」
「もちろんその格好は・・・猿だよね？」
「はい、そうっす」
嬉しそうに自分が未だに人間になれていないことを告げる岩雄くん。
まあそこは岩雄くんの以前を知っている僕らは特に驚かないんだけ

どね。
もうひとつの疑問について聞く。
「で、後ろでムチをかまえているこの人は？」
会話中も岩雄くんの後ろで常にムチをかまえたままの女性。
場違いというか、ここには絶対いてはいけない格好をしている。
「よくわかんないんですけど、調教師さんらしいです」
「へえ・・・」
まあ間違ってはいないようだけどその説明では不十分だな。
「お二人は知り合い？」
「いや、今日ここではじめて会いました」
なんてこった。ますます訳が分からないよ
困惑の色を隠せない僕に岩雄くんが小声で話しかける。
「それがですね、大和さん。どうやら派遣の会社が遊園地を大人の遊園地と勘違いしてたみたいなんですよ・・・」
気まずそうな顔を浮かべる岩雄くん。
なるほど、それで調教師がボンテージ姿なのか。
いやいや、なるほどとか言っちゃったけどやっぱり言わせて貰うわ。
なんだそれ。
「ほら、油売ってないでさっさとショーの準備行くよ」
パチン
持っていたムチで叩かれる岩雄くん。
「うっ、すいません女王様」
やっぱり女王様だった。
「そこはウキーでしょ、この猿！」
パチン
「ウキー！」
振り返ることなく、寂しげな背中の猿が立ち去っていく。
どんなショーをする気なんだよ。
っていうかあんな不審者入場させてんじゃねーよ遊園地。
「もういいよ」

姿が見えなくなったところでひなたの肩を叩いた。
ひなたはゆっくりと目を開ける。
「叩かれた？」
どきっとした。
「な、なんで？」
「ぱちんって聞こえた」
「ひなた、そんなことよりもお腹すかない？」
「少し」
「じゃあ食べに行こう」
今日一日、絶対にあの二人にひなたを会わせないと心に誓い、僕らはレストランへと向かった。

3、三話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありませんん

3、三話目

パンフレットを頼りに、僕らは飲食店の密集するエリアにやって来た。
和食、洋食、中華。料理の種類が多いレストラン。
常に長い列の出来ているハンバーガーショップ。
お菓子類を専門としたお土産屋もある。
どの店内からも美味しそうな匂いが漂ってくる。
「確かに美味しそうだが、高いなあ」
「そうだね。だから姉さんはあんまりばくばく食べないでよ」
「へいへい」
こういうレジャー施設のお食事どころは料金が少し高く設定されている。
いつもの姉さんのペースで食べられては大変なので、先に釘を刺しておいた。
「ひなたは何か食べたいものあった？」
「これ」
ショーウィンドウに並ぶ一つのプレートを指差した。
定番の子供が好きそうなハンバーグやらポテトサラダやらが盛り付けられ、ご飯には外国の旗が指してある。玩具もついたべったべたなお子様ランチ。
しかし値段は大人顔負けの千百円。
流石姉さんの娘、いいとこ見てるよ。
「ぐっ・・・」
お財布のことを考えると多少辛いが、自分から何が食べたいか聞いた手前駄目とも言いづらい。
「うわっ、びっくりしたー」
そのとき、隣にいた姉さんが振り向きざまに声を上げた。
僕も振り返り、同じように声を上げた。

「うわっ、何ですか」
そこに立っていたのは、入園直後に姉さんのタックルを受けたウサギのマスコットだった。
まだ諦めずに僕らのことを追いかけていたのか。
「再戦か？いいだろう、行くぞ！」
姉さんはそでをまくり戦闘態勢にはいる。
岩雄くんを沈めた右腕を使う気だ。
ウサギは慌てて首を横にぶんぶんと振った。
「落ち着いて姉さん。次に何かしたらここから連れ出されるよ」
「ちっ、しょうがない」
まくったそでを元に戻す姉さん。
「あのー、それで何の御用でしょうか？できれば言葉で言ってもらえるとありがたいんですが」
ウサギが僕たちに言いたいことなんて腐るほどあるに決まっているが分かってて一応聞いてみた。
ずずずっと側によるウサギ。
近くで見ると顔がでかいせいか迫力があって怖い！
ひなたが僕の足にしがみついた。
するとウサギは何も言わずに二枚の紙切れをよこした。
もしかして風船の請求書か！？
「えーっと、なになに。お食事券・・・園内ならどこでも使えて一品無料、飲み物はおかわり自由・・・これを僕たちにくれるんですか？」
僕は状況が飲み込めず、ウサギに尋ねた。
すると大きな耳を揺らしながら首を縦にぶんぶんとふる。
どういうことだ。
お金を請求される覚えはあるが、こんなものを貰う覚えはないぞ。
草食動物から獰猛な肉食動物（姉さん）への貢物か？
「とりあえず、ありがとうございます・・・」
腑に落ちないが貰えるものは貰っておこう。

感謝を言い、その場を立ち去ろうとする。
がしっ
着ぐるみのもこもこな手が僕の襟首を掴んだ。
「何ですか何ですか」
そのまま抵抗の余地なく後ろに引きずられていく。
「うわー助けて姉さん！不思議の国へ連れてかれるー！」
そこでようやく気がついた姉さんが駆け寄ってきて、
「悪いな大和、二枚しかないんだ。お前はウサギと仲良く人参でも食べてきてくれ」
僕の手からチケットを奪っていった。
「よし、入るぞひなた」
「ん」
あれ、ひなたまで僕のこと見て見ぬふりするの？
誘拐される僕を気にも留めず、姉さんたちはレストランの中へ消えていった。

人気の少ないところまで引きずられていき、最後には茂みに投げ込まれた。
ここが体育館裏でないことだけが唯一の救いだ。
後を追うように巨大なウサギが茂みに飛び込んでくる。
このまま食べられてしまうのか。
まさにこの世は弱肉強食。
いいだろう、僕は打たれ強さにだけは自信があるぞ。
どこからでもかかってこい！
僕は土下座したままウサギの出方を待った。
「あ、あのぅ・・・」
蚊の鳴くような声がした。
その声は紛れもなく目の前の食人ウサギから発せられたものであり、驚くべきことにそれは女の子の声だった。
「今、はずしますね」

自分の頭に手をかけるウサギ。
あれ、もしかして今すごい状況にいないか？
僕はウサギに人気のない茂みへ投げ込まれ、そのウサギは女の子。
つまり僕は女の子に人気のない茂みへ投げ込まれたということだ。
急に色めきだってきたぞ。
今の襲われるは先ほどまでの襲われるとじゃ意味が全然違ってくる。
僕は心躍らせながら、素顔が見えるのを待った。
「・・・」
「こっ、こんにちは大和くん」
「やり直し」
大きなウサギのかぶりものを僕はかぶせ直した。
「えええっ！？」
慌ててもう一度かぶりものをとるかぐや。
「何だよ、かぐやかよ・・・」
「ええ！？私です・・・えっと・・・ごめんなさい」
「別に謝らなくてもいいけどさ」
サンバの曲で気持ちよく踊っていた心が急に阿波踊りの曲になってきょとんとしているような気分だ。
「あのー、つかぬ事を聞きますけど私正体バレてましたか？」
「ばれちゃいないけど、正直がっかりだな。アンパンのピンチにかけつけたのが天丼だったくらい」
「うっ、がっかりなんてひどいです・・・」
とは言っても姉さんの蹴りをくらっても立ち上がるようなたくましい骨格の女性が出てこられても困るけど。
「ここでバイトしてるの？」
「はい・・・」
かぐやはうな垂れながら返事をした。
「へー、あっもしかして姉さんがタックルしたのって」
「私ですぅ・・・痛かったです・・・」
とうとうかぐやは泣き出してしまった。

めんどくさい・・・。
とりあえず褒めて機嫌をとってみるか。
「普通、姉さんのタックルをまともに食らったら痛いじゃ済まないよ。すごいじゃないか、中になんか仕掛けでもあるのか？」
そう言いながら僕はウサギのかぶりものを自分の頭にかぶせた。
（特に何もないな。ていうか熱い）
「あのあの、わたわた、私たくさん走ったので汗を・・・かかかいちゃったかもしれなくて」
「ああ、悪い。すぐはずすよ・・・よっと」
「あのあの、・・・くっくっ、臭くなかったですか？」
恐る恐る聞いてくるかぐや。
「いや、別に」
特には嫌なにおいはしなかった。
「そ、そそそそそうですか！？」
かぐやはほっとため息をついた後、ぎこちない笑顔を見せた。
おお、褒めたら元気になったか。
「そうだ、大和くんって昼食まだですよね」
「そうだけど」
「よかったら、私と一緒に食べませんか？」
「いやだよ」
かぐやの顔が一瞬で絶望に染まる。
「え・・・何でですか・・・私とじゃ嫌ですか・・・」
うるうると瞳に涙のダムができあがった。
「お前今バイト中だろ。僕のせいでクビになったとか言われたら困るし」
「・・・へっ？あ、いや、今休憩ちゅ」
「飯ぐらいだったら今度うちに食べにくればいいから、今はバイトに専念しろよ」
「え・・・大和くんの家に・・・はい！お仕事頑張ってきます！」
かぐやは颯爽とウサギの生首をかぶりスキップで園内へ消えていっ

た。
そういえばかぐやは一体何がしたかったんだ。
毒でも盛る気だったのか？

姉さんたちの入ったレストランに戻ってきた。
「いらっしゃいませー、お一人様ですか？」
「いえ、連れが来てるはずなんですけど・・・小さい女の子連れの女性がいませんか？」
ウェイターは困った顔で
「ええっと、そういった方は沢山いるので・・・」
と店内を見回した。
そりゃそうか。
「ああ、すみません・・・この人なんですけど」
僕は携帯電話に入っていた鬼の格好した姉さんの画像を見せた。
「ああ、この方でしたら奥の座敷ですよ。ご案内します」

「ぐーがー」
姉さんは座敷に寝転がりすごいいびきをかいて寝ていた。
その向かい側ではひなたがゆっくりとアイスを食べている途中。
「姉さんお酒飲んでた？」
「飲んでた」
顔はこっちに向けずにアイスをほお張りながら答える。
「そっか・・・」
何やってんだこの人はひなたをほったらかして。
「でもさっきまで起きてた」
びくんと姉さんの体が跳ねる。
「・・・姉さんもしかして起きてる？」
返事はない。
「ん」
ひなたは前もって書かれていたメモを僕に見せた。

『ひなたと大和、二人でラブラブデート！！』
・・・なんだこれ。
「えっと、二人でアトラクションを回ってくればいいの？」
いびきをかきながらこくこくとうなずく姉さん。
やっぱり起きてるじゃないかよ。
また姉さんの道楽か。
「はあ・・・しょうがない、じゃあ行こうか」
ちょうどアイスを食べ終わったひなたの手をとった。
「ん」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8717y/

smile

2011年12月13日09時51分発行